

仙台市文化財調査報告書第79集

欠ノ上工遺跡

— 平安時代後半～中世の水田跡 —

1985年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市文化財調査報告書第79集

欠ノ上工遺跡

— 平安時代後半～中世の水田跡 —

1985年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

序

近年、埋蔵文化財の発掘調査の方法も、遺構・遺物の性格をきわめるに留らず、遺構・遺物が包蔵されている環境条件をも解き明かすことによって、より詳細な生活環境の復原にまで及ぶ時代に入ったといえる。土壤学、地形学、植物生態学、地質学等はもとより花粉分析、プランクトン・オパール分析、熱ルミネッセンス法、フィッショントラック法など物理・化学の領域との連携をも重要視する方向に動いている。特に沖積低地に営まれた遺跡の発掘調査は特に顕著であるといえる。

本書は、久ノ上I遺跡の発掘調査の成果をまとめたものであるが、関連科学との連携をもちながら行った調査である。平安中期に始まった稻作は、平安後半～中世前半までの水田面では、10アール当り7.6トンの生産量を得ていること、中世後半の乾燥した微高地に於ける稻作は、10アール当り5.5トン、江戸時代になると全域で水田耕作が実施されていて、10アール当り11.1トンの生産量を得ていたことが解き明かされている。

こうして得られた資料は、歴史文献学とのさらなる吟味、検討を行うことによって、各時代毎の生産史や生活環境の様相が実態的に解明されることを考えるとき、埋蔵文化財がもつ意義はさらに深いものがあるといえよう。

最近の市街地拡大に伴う開発行為は増加の一途をたどっている。開発と保護という相反する現象をいかに調整を図っていくかは、文化財の保護行政にとっては、迫られた重大な課題である。文化財がもつ意味を深く認識し、市民と広く公議を起し、協調しながら文化財保護に対する思想高揚策を講ずる必要を感じるものである。

さて、本書が多少なりとも文化財保護行政に貢献することを深く念じて序とする次第である。

昭和60年3月

仙台市教育委員会

委員長 藤井 黎

例　　言

1. 本書は宅地造成に先立って行なった欠ノ上Ⅰ遺跡（仙台市文化財登録番号C-287）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査・遺物整理は社会教育課文化財調査係 佐藤甲二・渡辺誠・小野寺和幸が担当し、陶磁器の鑑定は、佐藤津洋が行なった。
3. 本書の編集・執筆は佐藤甲二が行ない、プランツ・オパール分析に関しては、佐々木章氏・藤原宏志氏からの御寄稿を頂き、付章として収録させて頂いた。
大分短期大学 佐々木章氏 仙台：欠ノ上遺跡土壤のプランツ・オパール分析
宮崎大学農学部 藤原宏志氏
4. 種子の同定は東北大學農學部 川口清親氏に、火山灰の同定は東北大學農學部 山田一郎氏に、石製品の石質鑑定は仙台市科学館 佐々木陳氏にお願いした。
5. 本書中の土色については「新版標準土色帳（小山・竹原：1973）を使用した。
6. 本書に掲載した第1図は建設省国土地理院発行の2万5千分の1「仙台西南部」「仙台東南部」を使用した。
7. 方位は全て磁北を北としている。磁北方向は真北に対して西偏7°0'である。
8. 全資料は仙台市教育委員会で一括保管してあるので活用されたい。

発掘調査参加者名

浅見礼子 大山のり子 菊池豊 佐々木うめの 佐々木茂信 斎藤紀子 黒田久子 庄子教
庄司明 柏倉セツ子 佐藤紀美 佐藤みよ 菅井きみ子 菅井ちよの 菅井かつの 丹野正作
仲山市子 村上令子 松林四郎 吉野たま子 本郷孝治 横山麗子 村上篤 宮崎進 阿部貴
大宮裕二 菅ノ又三千代 丸子正市 三塚朝代 沼田幸子 佐藤幸一郎 平磯けい子 加藤和
大内幸子 今出宏子 大槻章 高橋秀夫 佐藤延子

遺物整理参加者名

菊池豊 庄子教 村上篤 宮崎進 大宮裕二 阿部多津子 金沢君代



1. II区 IIIb層水田跡
(南から)



2. II区 IVa層水田跡
(北から)



3. I区 IVa層水田跡
(北から)



4. 青磁・常滑・唐津・志野(外面)



青磁・常滑・唐津・志野(内面)



5. 濑戸・美濃・肥前・相馬(外面)



瀬戸・美濃・肥前・相馬(内面)



6. 濑戸?

本文目次

序文

例言

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境	1
第Ⅱ章 調査の方法と概要	3
1. 調査に至る経過	3
2. 調査方法	3
3. 基本層位	3
4. 調査概要	4
第Ⅲ章 検出遺構	13
1. I区	13
2. II区	14
3. III区	19
4. その他の地区	20
第Ⅳ章 出土遺物	28
第Ⅴ章 考察とまとめ	33
1. 検出遺構の所属年代	33
2. 水田跡について	34
3. まとめ	35
付章 仙台：矢ノ上I遺跡土壤のプラント・オパール分析	36

写真図版目次

写真図版 1 遺跡全景 1	41	写真図版 9 II区検出遺構 3	49
写真図版 2 遺跡全景 2・基本層位	42	写真図版10 II区検出遺構 4	50
写真図版 3 O-18グリッド検出遺構	43	写真図版11 III区検出遺構 1	51
写真図版 4 J-18グリッド検出遺構	44	写真図版12 III区検出遺構 2	
写真図版 5 I区検出遺構 1	45	・雨水管検出遺構	52
写真図版 6 T区検出遺構 2	46	写真図版13 出土遺物 1	53
写真図版 7 II区検出遺構 1	47	写真図版14 出土遺物 2	54
写真図版 8 II区検出遺構 2	48	写真図版15 出土遺物 3	55

写真図版16 出土遺物 4	56	写真図版19 出土遺物 7	59
写真図版17 出土遺物 5	57		
写真図版18 出土遺物 6	58		

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	1
第2図 調査対象区現況図及びグリッド配置図	5
第3図 基本層位及び各グリッド土層柱状図	7・8
第4図 III b 層水田跡作土上面畦・水路平面図	9・10
第5図 IV a 層水田跡作土上面畦・水路平面図	11・12
第6図 I 区III b 層・IV a 層水田跡平面・断面図	15・16
第7図 II 区Ⅲ層上面検出構造、III b 層水田跡平面・断面図	17・18
第8図 II 区IV a 層水田跡平面・断面図	21・22
第9図 III 区III b 層・IV a 層水田跡平面・断面図	23・24
第10図 O-18グリッドIII b 層・IV a 層水田跡水田跡平面・断面図	25
第11図 J-18グリッド、雨水管 (S-18グリッド) III b・IV a 層水田跡平面・断面図	27
第12図 出土遺物 (土師器・陶磁器)	30
第13図 出土遺物 (瓦・人形・石製品 1)	31
第14図 出土遺物 (石製品 2・金属製品)	32
第15図 砂礫層低下想定ライン	35
第16図 プラント・オパール定量分析手順	37
第17図 プラント・オパールから推定した植物体量 1)	38
第18図 プラント・オパールから推定した植物体量 2)	39

表 目 次

第1表 基本層位土層註記表	6
第2表 出土遺物総数量表	29
第3表 III b 層水田跡と IV a 層水田跡の比較	34
第4表 植物体中の珪化機動細胞	37
第5表 卷頭カラー図版・写真図版遺物観察表	60

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

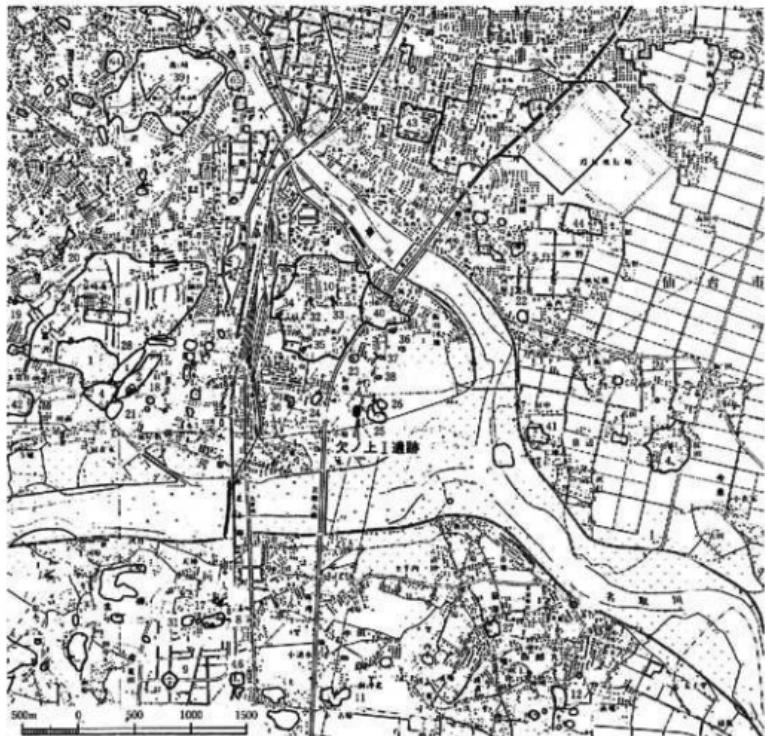
仙台市は西側に標高300～100mの丘陵地帯、東側には東～南東流する七北田川、名取川一広瀬川によって形成された沖積平野が広がる。また、これら河川の両岸には4～5段から成る河岸段丘が発達している。沖積面は地形の性質・地域的まとまりから幾つかの低地に分けられており、名取川と支流広瀬川に挟まれた地域は郡山低地と呼ばれている。

欠ノ上I遺跡は、郡山低地東端に位置し、後背湿地上に立地する。東北本線長町駅の南東1.6kmで、遺跡のすぐ西を仙台バイパスが南北に走っている。南側を東流する名取川まで約0.7kmで、遺跡の南東約1kmの地点で名取川に広瀬川が合流する。遺跡の現況は水田で、標高7.5～8.0mの間である。南側の名取川の堤防との比高差が2m強あるためか、やや低い感じのする地形である。この地区は、以前まで名取川の氾濫により、よく冠水した地区の一つで、激しい時には2m以上も冠水したという。

名取川と広瀬川に挟まれた沖積面は、仙台市域でも考古学的調査が比較的多く行なわれている地域である。富沢地区では、下ノ内浦遺跡(28)より縄文時代早期の押型文土器が出土しており、すでにこの時期には人間の活動の場となっていたことが明らかにされている。縄文時代も中期中葉以降になると自然堤防上に立地する六反田遺跡(2)、下ノ内浦遺跡、伊古田遺跡(21)等に集落、墓域(配石遺構)が形成され始め、当地区は居住域としての性格をおび、その後の時代へと受け継がれる。弥生時代になると富沢地区は広大な後背湿地を利用し、水田が営まれるようになる。富沢水田遺跡(6)からは、弥生時代中期から中世にわたる水田跡が検出されている。東北本線の東側に当る郡山地区では、現在のところ縄文時代の痕跡は、西台畠遺跡(5)で後期の土器が出土したのみである。遺構を伴う例は全て弥生時代以降で、西台畠遺跡では弥生中期の墓が検出されている。その後の7世紀後半から8世紀初頭には、当地区に多賀城以前の官衙跡と考えられる郡山遺跡(10)が創建されている。また、当地区には中世の古碑群が多く残っており、広瀬川の自然堤防上には中世から近世にかけての北日城跡(40)が築かれている。

以上のように名取川と広瀬川に挟まれた沖積面には、縄文時代早期より現代に至るまでのさまざまな遺跡が残されている。これら遺跡は、地形的制約(自然堤防、後背湿地等)を受けつつも、逆にその特徴を利用することにより、各種の遺跡を生み出し、これを発展させてきた。今回、仙台バイパスより東側の地域が初めて調査対象となった。これにより、この地域の歴史がより広域的に明らかにされていくものと思われる。

註：経済企画庁『地形・表層地質・土じょう 仙台』 1967



No.	遺跡名	種別	立地	年代	No.	遺跡名	種別	立地	年代
1	山口遺跡	墓葬跡	自然地帯	平安後	24	籠ノ湖遺跡	集合地	自然地帯	平安後
2	六反田遺跡	墓葬跡	自然地帯	平安後	25	矢ノ上日遺跡	集合地	自然地帯	平安後
3	泉崎遺跡	墓葬跡	河原野山地附近	平安後	26	矢ノ上日遺跡	集合地	自然地帯	平安後
4	下ノ内遺跡	墓葬跡	自然地帯	平安後	27	中田遺跡	墓葬跡	自然地帯	平安後
5	西台遺跡	墓葬跡	自然地帯	平安後	28	下ノ内遺跡	墓葬跡、墓群	自然地帯	平安後
6	宮沢水田遺跡	水田跡	沖積平野	弥生～中世	29	仙台東部条理跡	条理遺跡	沖積平野	新石器～平安後
7	南小魚池跡	墓葬跡	冲積平野	弥生～近世	30	各地遺跡	集合地	自然地帯	平安後
8	安久遠遺跡	墓葬跡、古墳群	自然地帯	平安～近世	31	安久遠跡	墓葬跡、古墳	沖積平野	新石器～平安後
9	栗遺跡	墓葬跡	自然地帯	平安	32	八幡社古跡群	——	中世	後
10	郡山遺跡	官道跡・住居跡	自然地帯	平安後	33	郡山三丁目古跡群	——	中世	後
11	後河原遺跡	水田跡	山地風景・海岸風景	弥生～近世	34	長町駅古跡群	——	中世	後
12	戸ノ内日遺跡	墓葬跡、墓群	自然地帯	平安後	35	調訪古跡群	——	中世	後
13	牛馬遺跡	墓葬跡、城跡	自然地帯	平安～近世	36	宅地古跡群	——	中世	後
14	鹿見塚古墳	前方後円墳	冲積平野	古墳	37	北日古跡群	——	中世	後
15	京極寺横穴群	横穴古跡群	丘陵	平安	38	六田東古跡群	——	中世	後
16	坊塚古墳	円墳	冲積平野	古墳	39	庄ヶ崎城跡	城	新石器時代及び平安後	後
17	安久賀跡古墳	(財所在地)	自然地帯	古墳	40	北日城跡	城	新石器時代	後
18	大野田古墳	円墳?	冲積平野	古墳	41	日進城跡	城	冲積平野	中世～後
19	真町古墳	前方後円墳	台地	古墳	42	高武尾跡	城	自然地帯	中世～後
20	砂押古墳	円墳(はいづの跡)	台地	古墳	43	都林城跡	城	冲積平野・鶴見川	中世～近世
21	伊吉田遺跡	墓葬跡	自然地帯	平安後	44	仲野城跡	城	自然地帯	中世～後
22	河原越遺跡	墓葬跡	自然地帯	平安後	45	今泉城跡出土瓦器群	——	中世～後	
23	矢来遺跡	集合地	自然地帯	平安後	46	御田能跡(跡沼跡)	城	冲積地	中世～後

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第Ⅱ章 調査の方法と概要

1. 調査に至る経過

広瀬・名取川に挟まれ、西辺を東北本線が走る郡山地区は、仙台バイパスにより東西に二分割されている。西侧には古くからの民家が立ち並び、仙台地域の中では現在、住宅の建て替えが盛んな地域の一つとなっている。これに比べ東側は、現在も水田地帯の面影を残す地域であるが、近年、他地域と同様に宅地造成の波がおよせている。このたび、欠ノ上T遺跡を包括する仙台市郡山字谷地田西1-1他の1900m²に宅地が造成されることとなった。仙台市教育委員会では、申請者仙台市農業協同組合、施工主大木建設株式会社と協議を重ね、その結果(1)開発地域に1m以上の盛土を加えることにより、地下遺構の保存を計る(2)ただし、取り付け道路下の地下埋設管等により、地下遺構が損なわれる可能性がある場所は調査対象とする(3)欠ノ上T遺跡の性格づけを引き出す調査を併行して行うことが三者間で確認された。これを受けて仙台市教育委員会では、造成工事に先がけ、事前調査を実施するに至った。

2. 調査方法 (第2図)

開発地域のほぼ中央に南北に取り付く道路を南北ライン(N-1'-W)とし、これに直行する東西ラインによりグリッドを設定し、調査を進めた。グリッドは1区画6×6mとした。南北ラインはA～Zまで、東西ラインは1～32まで設けた。調査に関しては、道路部分に当るグリッドを優先し、これを先行グリッドとした。その状況に応じ随時、拡張を行なった。

3. 基本層位 (第3図)

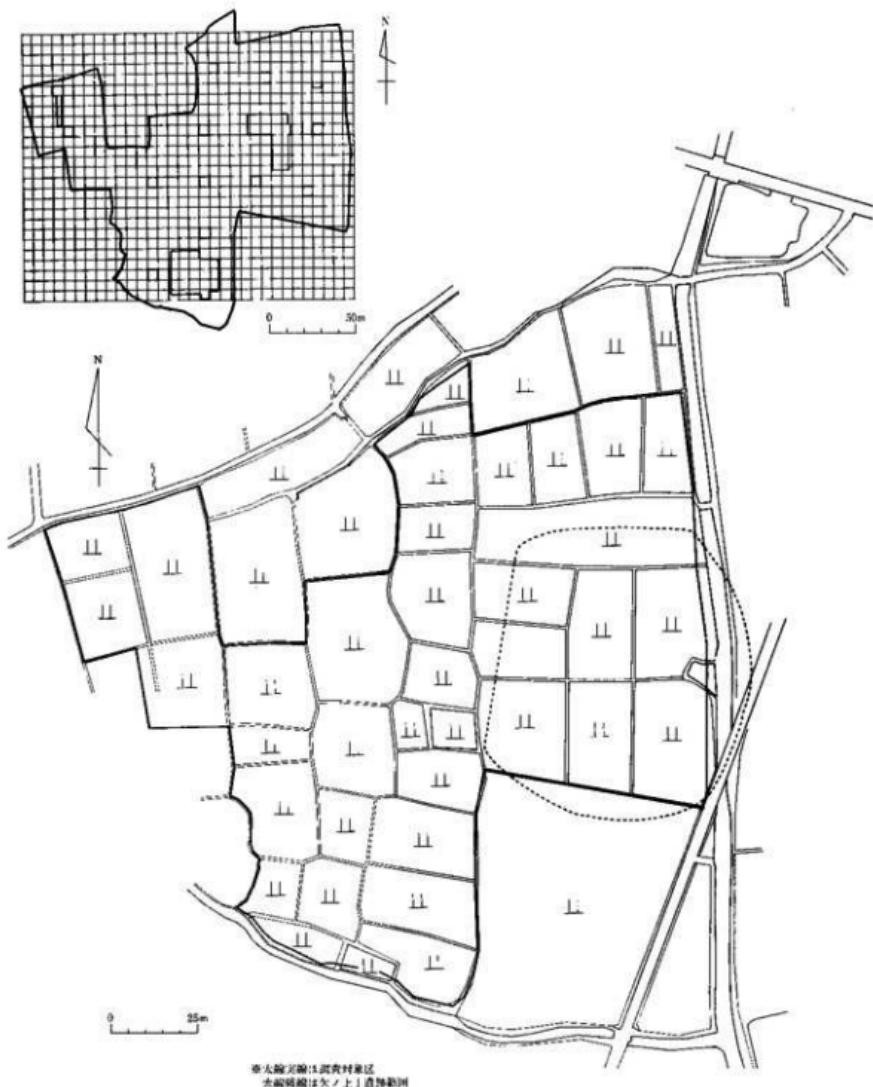
基本層位は現水田面のI層より砂礫層のII層までの大別11層が確認された。これらはさらに21層に細別される。細別層を含めた基本層位が、I層からII層まで順序だって認められた地点はない。Z-18グリッド南西隅では最もII層が上っており、表土下約1.2m(標高7.5mからは0.75m下)で顕を出す。これとは反対にD-19グリッド北西隅、O-13グリッド南西隅では、ともに表土下約2.7m(標高7.5mからは約2.5m下)でII層となり、II層が下っている。3は各グリッドに於ける砂礫層までの柱状図を、①～⑥までの縦断図で表わしたものである。1の矢印方向は、縦断面のII層の傾斜方向を示す(例えば②は南から北への下り傾斜)。また、3は各グリッド内のII層までの深さを色別けしたものである(最大値、最小値と両数値に近い数値のもののみ記載)。これによるとII層は調査地区北西側、南東側で上っており、その間は下っていることが理解出来る。

基本層の内、IIIc層、IVb層は、それぞれ水田作上、IIIb層、IVa層の直下に存在し、上層に酷似し

ている。この両層は、本来上層と同一のものであったが、耕作が及んだか（Ⅲ b・Ⅳ a）、及ばなかったか（Ⅲ c・Ⅳ b）によって分離されたものと考えたい。Ⅲ b' 層、Ⅳ a' 層は水田外部分と想定される F-4・5 地区に分布する。調査区ではⅢ c 層、Ⅳ b 層との連続性を確認出来る地点を見出せなかつたが、土性の上からは同一層の可能性も考えられる。Ⅶ 層中に含まれる火山灰は、降下年代が10世紀前半と考えられている灰白色火山灰である。この火山灰は、Ⅺ 層が下る地区においては、Ⅷ 層全体が火山灰となる。また逆に、Ⅺ 層が上る地点では、少量ブロック状に含まれたり、全く肉眼観察では認められない状態となっており、深みに沿つて流れ込んだ、すなわち二次堆積状況を示す。Ⅵ 層以下Ⅹ 層までの各層は、未分解の植物遺体を含み、いわゆるスクモ状を呈する場合がある。このような状態はⅪ 層の下る地点で顕著である。

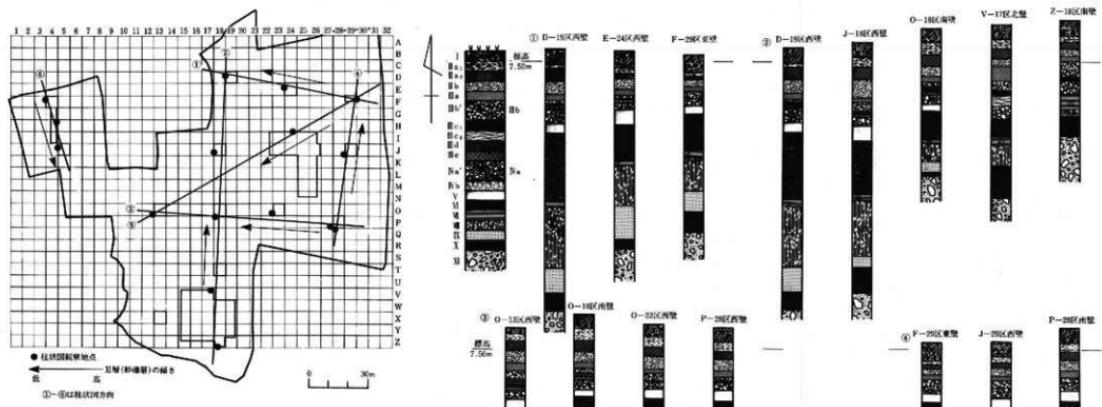
4. 調査概要

調査は昭和59年6月11日に開始し、同年8月31日までの約2.5ヶ月間実施した。調査対象面積は1900m²で、調査面積は約1850m²である。5月中はD-19、E-24、F-4・29、I-24、J-5・18・29、O-13・18・23、P-28、T-18、X-13、Z-18グリッドを試掘構とする調査を進めた。その結果、I-24、O-18、T-18、Z-18の4グリッドのⅢ b 層上面で、畦状の高まりが検出された。また、J-18、O-18、Z-18の3グリッドでは、Ⅳ a 層上面にも、畦状の高まりや、水路状の溝が認められた。この試掘調査と併行し、P-28グリッドでプラント・オ・パール分析を行なった結果、Ⅳ 層以上の各層に水田跡の可能性があることが判明した。これらの結果を踏えた上で、6月以降、本格的な調査を実施した。調査はⅡ 層以上の水田跡がすでに削手を受け、その痕跡をほとんどとどめていないことより、Ⅲ b 層、及びⅥ a 層の水田跡に絞られた。両層の水田跡の調査に際しては、水田跡1枚の規模と形状の把握を主眼に置いていた。以上に基づき、I-24グリッドを中心にして、東・西・南へ拡張したⅠ区（約500m²）、Z-18グリッドを中心にして、北・東・西へ拡張したⅡ区（約680m²）、F-4とJ-5グリッドを結ぶⅢ区（約130m²）の3拡張区を設けた。これら調査に加え、雨水管工事（幅約1m）により、Ⅲ b 層、Ⅳ a 層の水田跡が破壊される箇所（O-14～28、P-26、G～V-18グリッド）の調査も合せて行なった。その結果、まず、Ⅲ b 層上面では各区より中世の水田跡が検出された。また、Ⅳ a 層上面でも各区より平安時代末～中世にかけての水田跡が検出された。Ⅴ 層以下では、本調査区及び試掘区からも遺構らしきものは検出されていない。出土遺物は調査面積に比して平箱1箱（テンバコ27）と極端に少ない。その内でも、Ⅱ 層からの出土量が最も多く、Ⅴ 層以下では、Ⅷ 層より土師器片が1点出土（O-18グリッド）したのみである。遺物の種類としては陶磁器片が多い。出土遺物は数例を除き全て破片資料である。

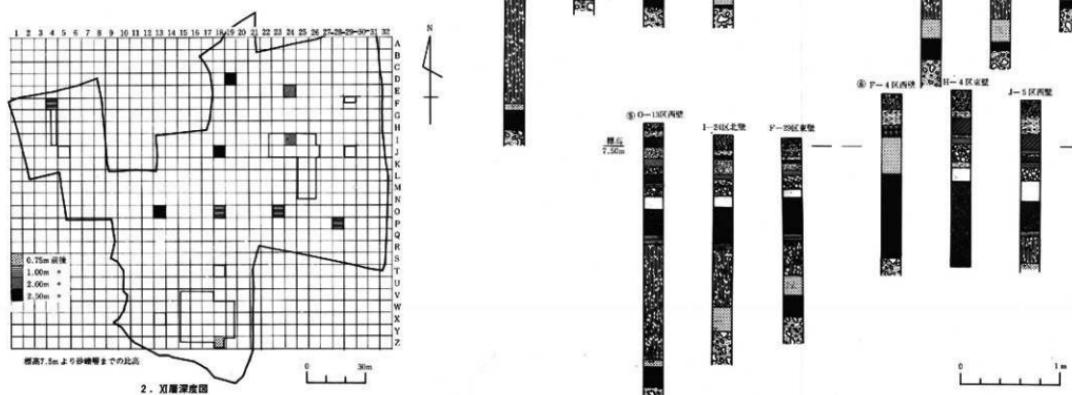


第2図 調査対象区現況図及びグリッド配置図

第1表 基本層位土層註記表



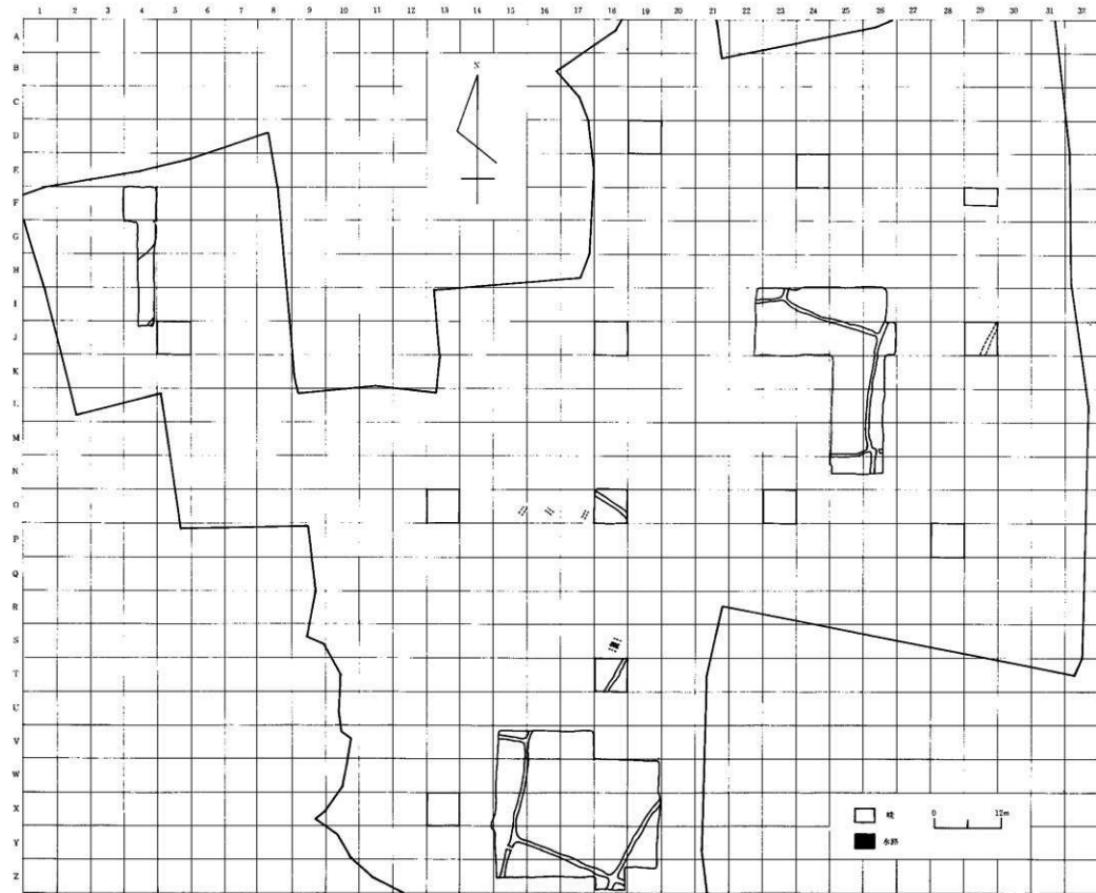
1. 土壌横断図



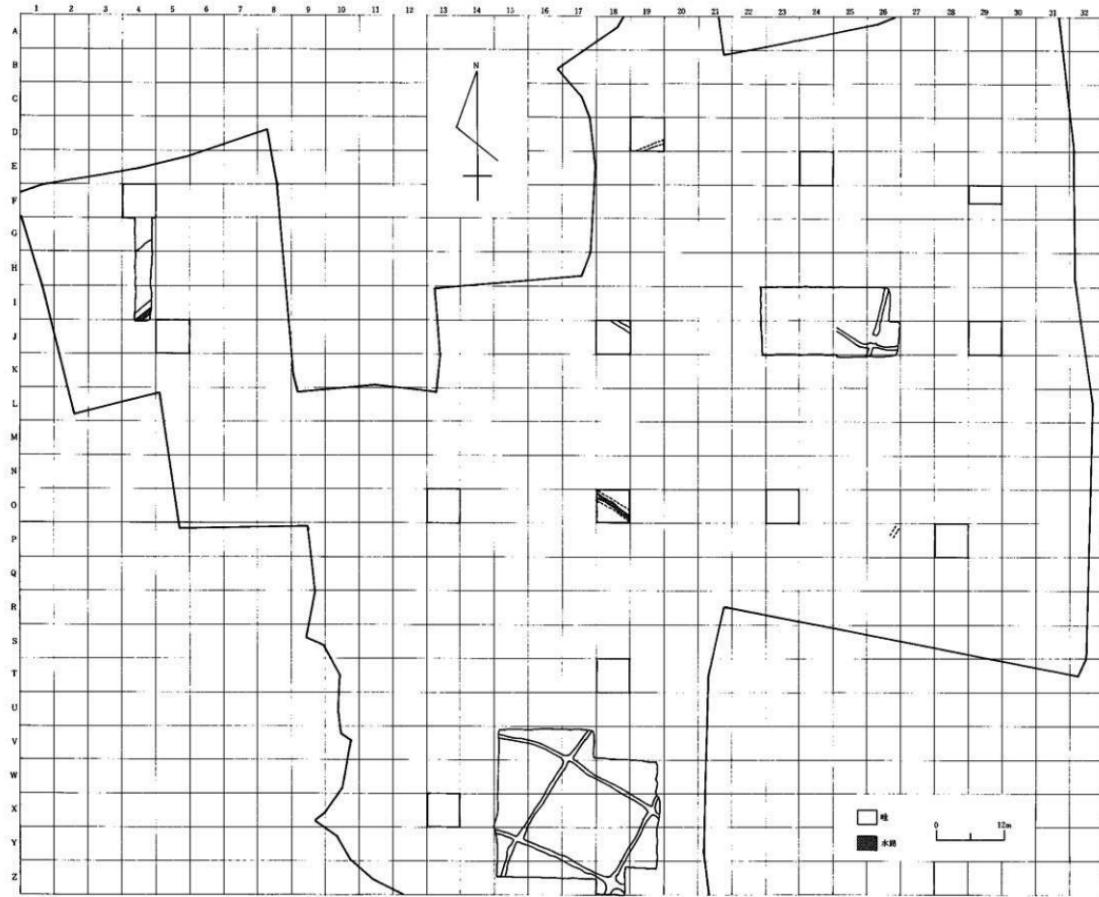
2. 土壌深度図

3. 土壌柱状図

第3図 基本層位及び各グリッド土層柱状図



第4図 Ⅲ b 層水田跡作土上面唯・水路平面図



第5図 Na村水田跡作土上面図・水路平面図

第Ⅲ章 検出遺構

1. I 区

I-24グリッドの試掘結果を踏え、東・西・南側へ拡張した調査区である。Ⅲ b層上面、Ⅳ a層上面で水田跡が検出された。

(1) Ⅲ b層水田跡（第6図）：I-24グリッドに於いてⅢ a層を若干掘り下げた段階で、西北西-東南東に延びるⅢ b層の高まりを検出した。これを追い、I-22・23・25・26、J-22～26、K-N-25・26グリッドの全て、あるいは一部を造構検出面まで開放した（開放面積481m²）。畦の検出面の多くは、Ⅲ a層上面であった。畦の両端には鉄分の沈着が認められた。作土の掘り上げは、Jグリッド以北とし、南側は検出のみにとどめた。

〔畦の配列〕 畦の方向は、南北方向（N-約5°-E）、北北東↔南南西方向（N-約26°-E）のものと、これに交わる東西方向（W-約6°-S）、西北西↔東南東方向（N-約69°-W）から成る。畦方向に画一的な方向性は見出せない。これらの畦が交わる部分は、「+」字状に交差する場合と、いずれかの方向のものが一方に向かって付かず「T」字状になる場合がある。

〔畦の断面形・規模〕 畦は作土と同一土壤が使用されており、作土中ではその区別は付かない。作土上面は凹凸が激しく、畦の高まりが、10cm前後認められた場合もあれば、ほとんど作土と同レベルのものもあった。畦の作土上の断面形は台形状で、上面がやや凹状を呈する部分もある。畦の幅は、上端の残存良好部分で約30cm、作土上面ではほぼ一定で80cm前後を測る。

〔水口〕 M-26グリッドの畦が交差する東側で検出されたのみである。上面検出のみである。

〔水田1区画の形状と規模〕 I区では水田1区画分を検出出来なかったが、水田の形状は方形状を呈するものと推測される。1辺の規模が判るものには2例あり、それぞれ18・20mを測る。

〔作土〕 底面はほぼ平坦で、作土幅は平均15cm前後である。作土の下層のⅣ a層上面には、鉄分の集積が認められる部分もある。作土底面は調査面に於いてはほぼ水平である。

〔出土遺物〕 作土中より土師質土器片が1点出土している。

(2) Ⅳ a層水田跡（第6図）：Ⅲ b層水田跡調査区の内、Jグリッド以北を調査対象とした。25ライン以東では畦、水口が検出されたが、それより西側では、畦は明確に検出されなかった。畦の検出層位はⅢ b層下面である。

〔畦の方向〕 Ⅲ b層水田跡の畦とほぼ同一方向を示す（N-約16°-E、N-約72°-W）。畦の交点は「十」字状である。

〔畦の断面形・規模〕 畦はⅢ b層水田と同様、作土と同一土壤である。畦の作土上の高まりは、顯著ではなく、明瞭な部分でも5cm以下である。畦の断面形は下弦の張りの少ない弧状を呈す。畦幅は、上端上で残存良好部分で約30cm、作土上面ではほぼ一定で、約90cmを測る。

〔水口〕 畦交点の北側で1ヶ所検出された。平面形は約130×80cmの隅丸長方形で、縦断面はひらいた「U」字状を呈す。深さは畦上面より約3cmと浅い。作土上面よりは1~2cm高い。

〔水田I区画の形状と規模〕 形状・規模とも当調査区では把握出来なかった。

〔作土〕 底面はほぼ平坦で、厚さは平均10cm程度である。下層のV層上面には、不明瞭ながら鉄分の集積が認められた。作土底面はIII a層水田と同様にほぼ水平である。

〔出土遺物〕 作土中より須恵器片(写真図版13-13)と土師質土器片が各1点出土した。

2. II 区

Z-18グリッドの試掘で、III b層上面及びIV a層上面で水田跡が検出された。この結果に基づきV-15~17、W-Z-15~19グリッドの全て、あるいは一部を開放した(開放面積685m²)。水田跡の他にはIII a層面上で、土壤が3基検出された。

層上面で、

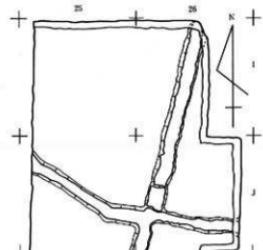
(1) 土壤(第7図) : III a層上面で1号土壤(W-15・16グリッド)、2号土壤(Y-15グリッド)、3号土壤(W・X-19グリッド)が検出された。平面形は1号が長楕円形(上・下端)、2号が不整楕円形(上・下端)、3号が隅丸形(上・下端)である。規模は1号が約170×80cm、深さ24cm、2号が約120×90cm、深さが18cm、3号が約100×100cm、深さ31cmである。各土壤とも堆積土が単層で類似性が強い。出土遺物はない。

(2) III b層水田跡(第7・8図) : III a層上面、多くはIII a層を少し掘り下げた段階で畦が検出された。I区と同様に畦の上面にマンガン粒の沈着、両端に鉄分の集積が認められた。尚、X・Y-15グリッドでも南北方向の鉄分の集積部分(細線部分)が検出されたが、上層の畦のなごりか、当水田畦の前段階のものなのか判別出来なかった(南壁土層には盛り上りが認められる)。

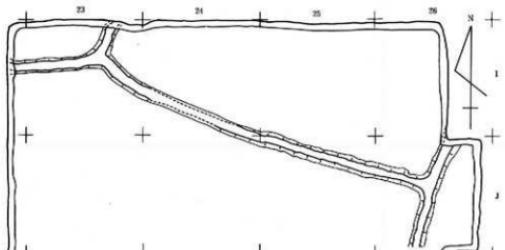
〔畦の配列〕 畦の方向は、I区と同様に南北方向(N-10°-E)、北北東↔南南西方向(N-約29°-E)のものと、これと交わる東西方向(N-83°-W)、西北西↔東南東方向(N-約64°-W)のものから成る。畦の交わる部分は、南北方向のものに東西方向のものが取り付き「T」字状を呈す。

〔畦の断面形・規模〕 I区同様、畦は作土と同一土壤が使用され、作土中に於いて、その区別は付かない。畦の作土上の高まりは、多くは10cm前後であるが、明確な高まりを持たない地点もある。畦の断面形は台形状あるいは下弦の張りの少ない弧状で、上面にはやや凹状を持つものもある。畦の両側の作土上面はやや凹状になる場合が多い。畦の幅は、上端では残存良好部分で約40cm、作土上面では75cm前後(17グリッド以西)、1m前後(18グリッド以東)に分れる。

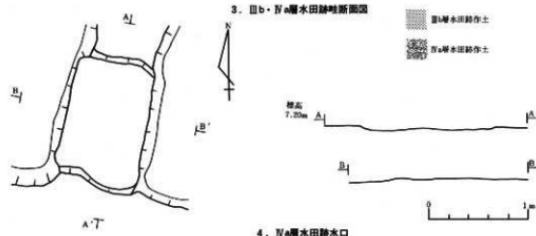
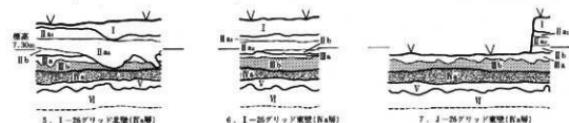
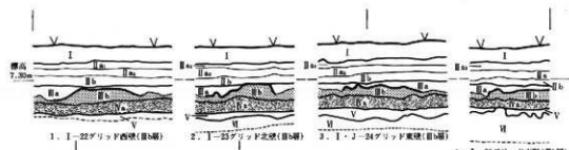
〔水口〕 Y-15グリッドの畦が交わる南面で1ヶ所検出された。平面形は約150×70cmの不整長方形で、断面は開いた「U」字状を呈す。深さは作土上面より約5cmを測り、水口の両側が



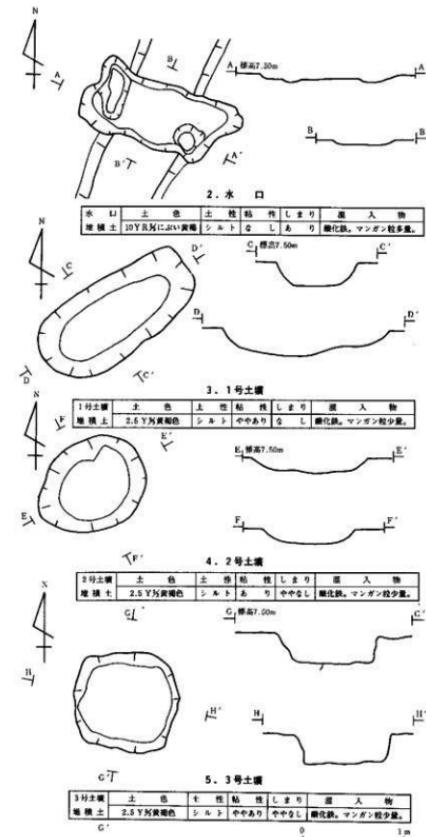
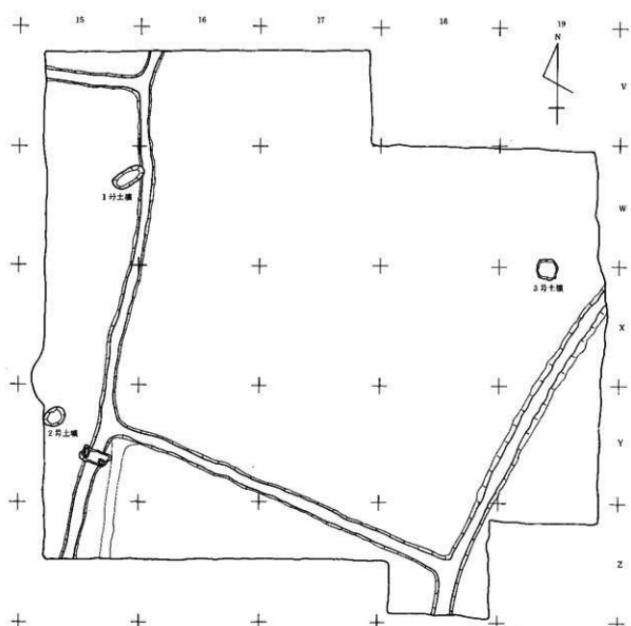
2. N-a層水田跡全体平面図(作土上面)



1. N-b層水田跡全体平面図(作土上面)



第6図 I区Ⅲb層・N-a層水田跡平面・断面図



第7図 II区Ⅲ層上面検出造構、Ⅲb層水田跡平面・断面図

これよりやや深む。V-16グリッド北壁断面（第8図2-1）のⅢb層高まりを珪とした場合、すぐ南側の平面の珪とは約65cmのずれ（断面珪が西側へ）が生じてくる。このすぐ南側に珪の交点があり、検出水口の珪交点からの距離を考慮した場合、ここにも水口が付いた可能性は高い。

〔水田1区画の形状と規模〕水田1区画分を検出出来なかった為、形状・規模を把握し得なかつた。ただし、短辺約20cmの長方形を呈することが推測される。

〔作土〕上面は凹凸が激しいが、下面是ほぼ平坦である。厚さは10~15cmである。下層のⅢc層上面には明確に鉄分の集積は認められない。作土底面は南南西→北北東方向に平均6.7mm/1mの比高差を持ち、緩やかな下り傾斜を示す。

〔出土遺物〕作土中より常滑産の陶器片（巻頭写真4-2）が1点出土したのみである。

(3) IVa層水田跡（第8図）：Ⅲb層水田作土排土後、あるいはⅢc層排土後に珪が検出された。珪の両端には鉄分の集積が認められた。18グリッド以西は作土の掘り上げは行なわなかつた。

〔珪の配列〕珪の方向は、I区よりやや東へ傾いた北北東↔南南西方向（N-約33°-E）のものとほぼこれに直交する西北西↔東南東方向（N-約64°-W）のものから成る。

〔珪の断面形・規模〕珪と作土は同一土壤である。従って作土中に於いては、その区別は付かない。珪の作土上の残存度は、Ⅲb層水田跡の珪との係り合いで大きく左右される。珪上にⅢb層水田の珪が重なった場合は残存度が良好で、5cm以上の高まりを示す（第8図2-4~6）。それに反し、重ならなかつた場合は、わずか数cm、あるいは作土上面と同レベルとなつてゐる。珪の断面形は下弦の張りの少ない弧状を呈す。珪の両側の作土上面は、Ⅲb層水田と同様にやや凹状となる。珪幅は上端の残存良好部分で約50cm、作土上面でほぼ均一で80cm前後を測る。

〔水口〕珪の作土上の残存度が不良であった為か検出されなかつた。

〔水田1区画の形状と規模〕当区では水田9区画分が検出された。しかし、明確な形状・規模が把握出来たのは1区画のみで、一辺約18mの正方形であった。

〔作土〕Ⅲb層水田同様、上面凹凸が激しいが、下面是ほぼ平坦である。厚さは10cm前後である。下層の上面には鉄分の集積が明瞭には認められない。作土底面はⅢb層水田跡と同様に、南南西→北北東方向に平均11.7mm/1mの比高差を持ち、緩やかな下り傾斜を示す。

3. Ⅲ 区

F-4、J-5グリッドの調査では何ら遺構を検出出来なかつた。しかし、F-4グリッドに於ける土層が、他の地点に比べ変化に豊んでいることと、出土遺物点数が多いことより、両グリッドを結ぶG-1~4グリッドの東側3mを拡張し、Ⅲ区とした。その結果当区からもI

・Ⅲ区と同様に、Ⅲ b層・Ⅳ a層の両水田跡が検出された。

(1) Ⅲ b層水田跡(第9図)：Ⅲ b層上面で並行に走る畦が二本検出された。ともに畦方向を北東→南西方向(N-約47°-E)にとる。南側の畦はI・Ⅱ区と同様に作土と同一土壤が使用されており、作土中の畦は判別出来ない。作土上面から約10cmの高まりを持ち、断面は台形状を呈す。畦の幅は上端で約50cm、作土上面では約80cmを測る。北側の畦は、作土と同一土壤であるが、水田部分の土壤と考えられるⅢ b'層から成る。Ⅲ b'層は作土上面より約10cm高くなり、徐々に高さを増しながら北側へと続く。東壁断面の観察では、畦の上りから北へ約7cmの地点で畦の下りが認められた。しかし、西壁断面では確認出来ず、平面調査に於いても、これを裏付ける明確な調査結果を得られなかった。作土の上面は凹凸が激しかったが、底面はほぼ平坦であった。作土の厚さは他の地区に比べ薄く10cm以下であった。作土の下層であるⅢ d層あるいはⅢ e層の上面には、明確な鉄分の集積が認められた。作土の底面は北→南方向に約10mm/1mのゆるやかな下り傾斜を示す。水口、及び水路は検出されなかった。

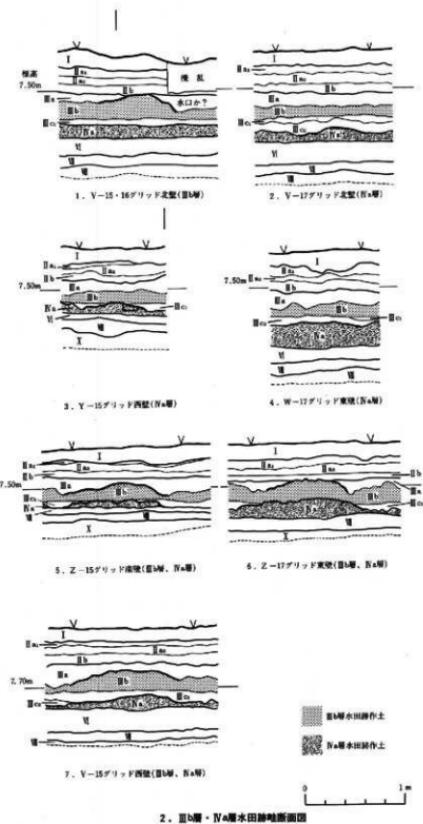
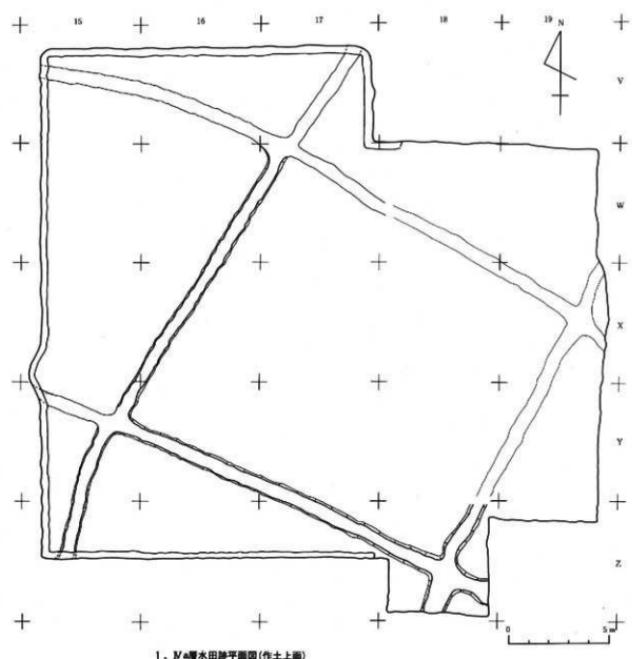
〔出土遺物〕Ⅲ b層からは土師質土器片2点のみの出土であった。しかし、Ⅲ b'層中よりは、土師器片11点、須恵器片6点、土師質土器片6点、骨片1点の合計24点の遺物が出土している。

(2) Ⅳ a層水田跡(第9図)：Ⅲ a層水田跡とほぼ同一地点で、同一方向の畦が検出された。ただし、南側の畦の中央には水路が取り付いている。畦はⅢ b層あるいはⅢ b'層堆土後に検出された。南側の畦は、作土と同一土壤が使用され、作土中の畦は区別出来ない。作土上面からの高まりは5~10cm程度、断面は台形状を呈す。畦の幅は上端で約220cm前後、作土上面では約260cm前後を測る。中央に上端幅約80cmの水路が走っており、畦はこの水路を境にして北に上端幅約90cm、南に上端幅約50cmの2本の畦に分断されている。水路は下端幅約30cmで、断面「U」字状を呈す。深さは30cm程度で、底面凹凸が激しい。堆積層は単層から成り、グライ化が著しい。北側の畦はⅣ a'層から成る。東壁断面では作土上面からの高まりはわずかしか認められないが、残存良好な部分では5cm前後の高まりを持つ。畦の上がりは、Ⅲ b層水田跡に比べ北へ1m弱後退する。東壁断面の観察ではⅢ b層水田跡と同様の地点で同じように畦の下りらしきものがみられた。しかし西壁断面、平面調査では、これを裏付けられるような調査結果は得られなかった。作土上面は凹凸が多いが、底面は平坦である。作土の厚さは15cm前後であった。作土の下層のⅣ b層上面には、不明瞭ながら鉄分の集積が認められる。作土の底面はⅢ b層水田跡同様、北→南方向へ10mm/1mの緩やかな傾斜を示す。

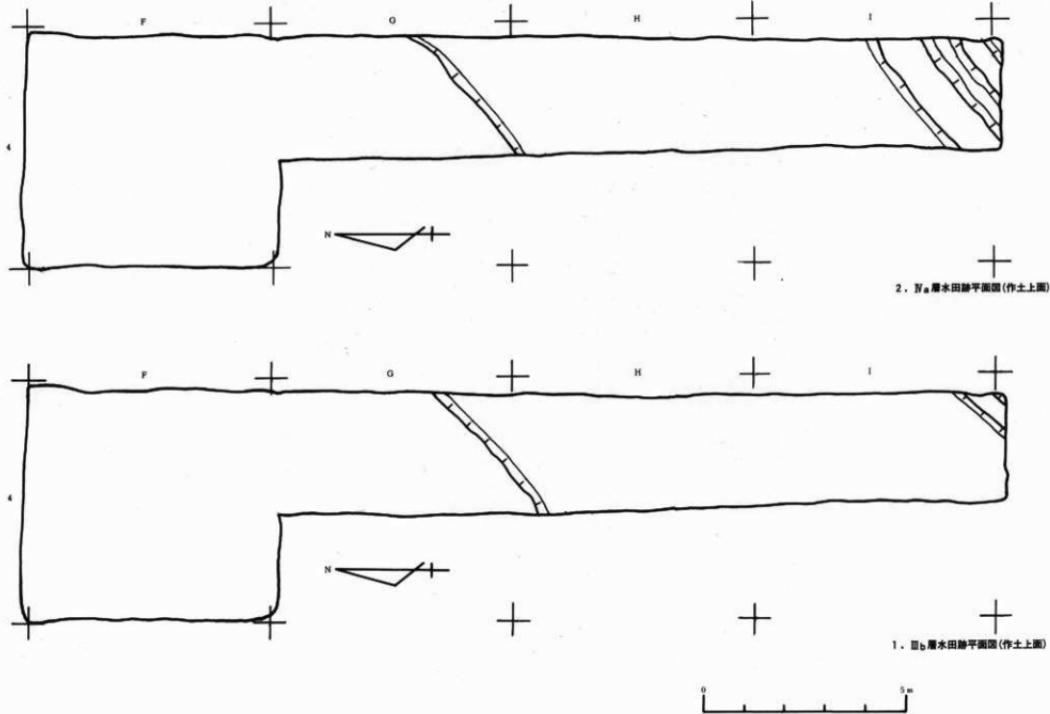
〔出土遺物〕作土(Ⅳ a層)からはモモの種子が1点出土したのみである。水路内堆積土からはモモの種子等の植物遺体が、Ⅳ a'層からは土師器片5点、須恵器片1点、土師質土器片7点が出土している。

4. その他の地区

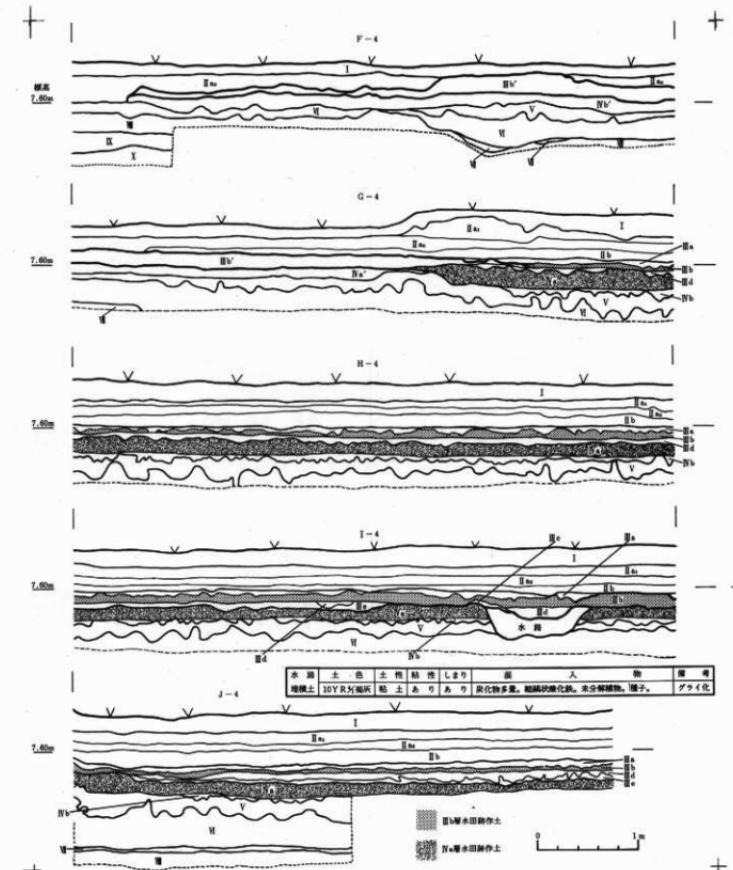
I~Ⅲ区以外の試掘グリッド及び雨水管部分でも、Ⅲ b層・Ⅳ a層水田跡の畦、水路、畦状の高まりが検出されている。



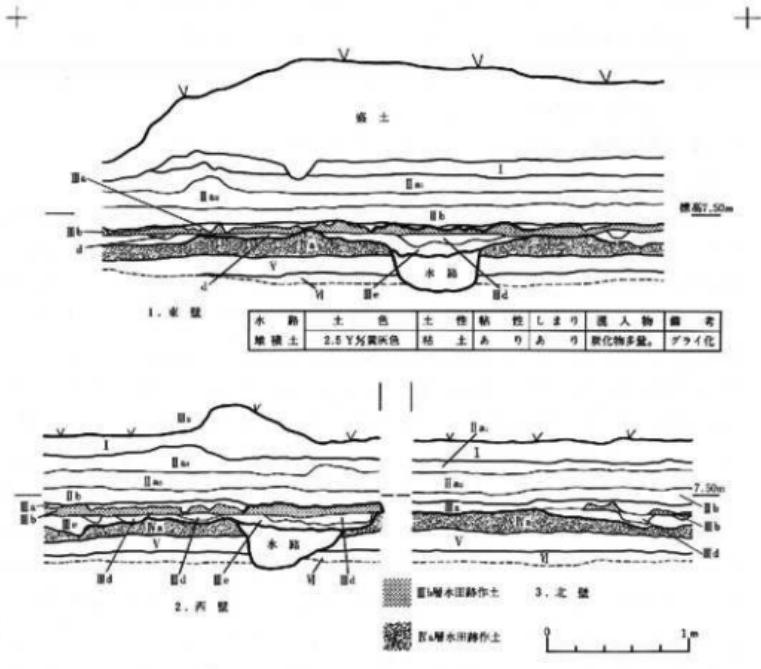
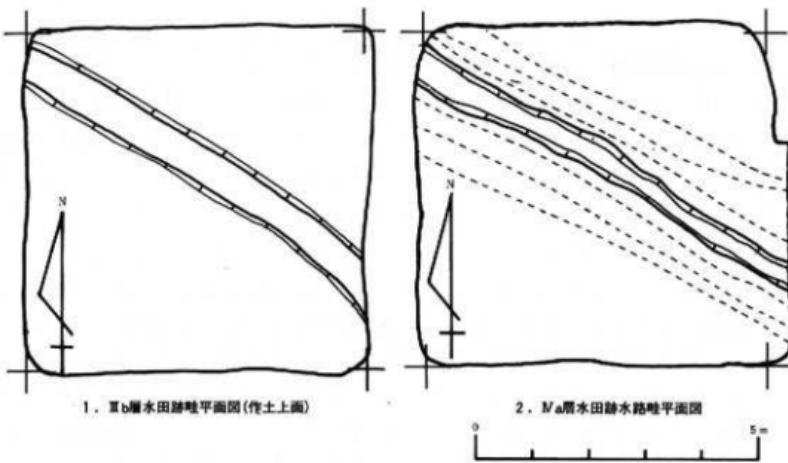
第8図 II区Ma層水田耕平面・断面図



第9図 Ⅲ区Ⅲb層・N-a層水田跡平面図・断面図



3. F~J 4 グリッド東壁セクション



3. 東壁・西壁・北壁Ⅲ b 層・IV a 層水田跡水路・水路断面図

第10図 O-18グリッドⅢ b 層・IV a 層水田跡平面・断面図

(1) **III b 層水田跡**：試掘グリッドでは J-19、O-18、T-18の3グリッドで検出された。雨水管部分では、O-15・16・17・20、P-26、S-18の各グリッドで検出された。

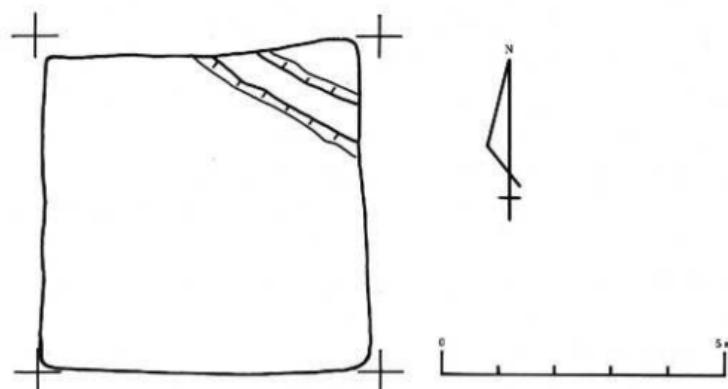
J-29グリッドでは、平面調査で畦は検出出来なかった。壁面観察によると北北東↔南南西(N-約27°-E)方向に畦が走っていたものと想定される。畦は作土上約5cmの高まりを持ち、断面形台形状を呈す。作土上の畦幅は推測値で約60cmである。O-18グリッド(第10図)では、西北西↔東南東方向(N-約56°-W)に畦が走る。畦は作土上面数cmの若干の高まりを持つのみである。畦作土上の断面形は台形状であるが、上面に顯著な窪みを持つ。畦幅は上端で約60cm、作土上面では約90cmである。T-18グリッドでは、北北東↔南南西(N-約32°-E)方向に伸びる幅約70cmのIII層の高まりを検出した。調査の関係上、検出面下に調査を進めなかった為、III b 層水田跡の上面での確認である。狭い範囲の為、明確に畦と断定出来る材料に貧しいが、畦方向は、I～III区のものとほぼ一致している。その他、S-18グリッド(第11図3・4)で確認された畦状の高まりは、畦状の中央部に溝が走っており、これらは畦と水路として断定してもよいと考える。畦は作土上面に約10cmの高まりを持ち、断面形は台形状を呈する。畦幅は上端で約170cm、作土上面で約200cmを測るが、ほぼ中央部に上端幅約50cm、下端幅20cm、深さ約15cmの水路が走る。水路は断面「U」字状で底面は凹凸が激しい。堆積土はグライ化した粘土の単層である。

(2) **IV a 層水田跡**：試掘グリッドではD-19、E-24、J-18、O-18の4グリッドで、雨水管部分では、O-20、P-26グリッドで検出された。

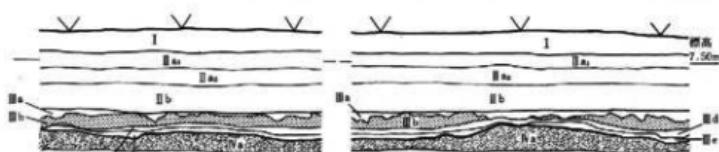
D-19グリッドでは平面調査に於いては検出出来なかった。壁面観察によると東北東↔西南西方向(N-約70°-E)に畦が走る。畦は作土上に約5cmの高まりを持ち、断面形は中央の窪んだ台形状を呈す。作土上の畦幅は推測値で約80cmである。E-24グリッドでは北壁で検出されたのみである。作土上の高まりは約6cmである。J-18グリッド(第11図)では西北西↔東南東方向(N-約59°-W)に畦が走る。畦は作土上に約5～10cmの高まりを持ち、断面形は下弦の張りの弱い弧状を呈す。畦幅は上端で約50cm、作土上で約85cmを測る。畦上には鉄分の集積が顯著であった。O-18グリッド(第10図)では、畦と水路が検出された。しかし畦及び水路の上部は平面調査に失敗し、壁面観察に頼らざるを得なかった。畦方向は、西北西↔東南東方向(N-約58°-W)で、中央に水路が走る。畦は作土上約5cmの高まりを持ち、作土上の畦幅は推定値で約220cmである。水路は上端幅推測値約60cmで、下端幅は約30～40cm、深さ約30cmを測る。断面「U」字状で、底面は凹凸状である。堆積土は単層で、グライ化が顯著である。雨水管部分では、3地点で畦状の高まりを検出したが、III b 層水田跡と同様、畦の可能性を指摘出来るのみである。

以上検出されたIII a 層・IV a 層水田跡の畦、畦状の高まりは、III b 層水田跡の場合はほぼIII a 層上面で、IV a 層水田の場合はIII層排土後に検出された。これら両水田跡の畦は、その作土

と同一土壤である。また、両水田跡の作土は調査地点全てで確認される。厚さはいずれも10~15cm内外である。作土の下層の上面には鉄分の集積が認められる場合があるが、IVa層水田跡に於いての方が顕著である。両水田跡からの出土遺物はない。

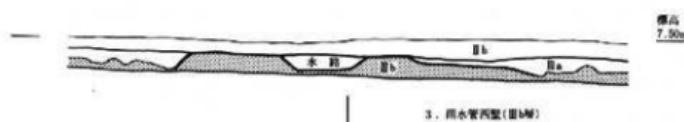


1. J-18グリッドIVa層水田跡平面図(作土上面)



1. J-18グリッド北壁(IVa層)

2. J-18グリッド東壁(IVa層)



3. 排水管西壁(IIIb層)



4. 排水管東壁(IIIb層)

IIIb層水田耕作土

IVa層水田耕作土



2. IIIb層・IVa層水田跡跡・水路断面図

第11図 J-18グリッド、雨水管 (S-18グリッド) IIIb層・IVa層水田跡平面図・断面図

第IV章 出土遺物

遺構及び基本層より、土師器、須恵器、土師質土器、陶磁器、瓦、石製品、金属製品、ガラス製品、骨が288点出土した。ほとんどが破片資料である。その他にⅣa層水田跡作土及び水路中より、モモの種子等の植物遺体が出土した。出土量が最も多かったのがⅡa層で、全体の6割強を占める。Ⅲb層・Ⅳa層の水田跡と水以外部分よりの出土は28点(Ⅲb層)、15点(Ⅳa層)と非常に少ない。V層以下では、わずかにⅣ層より、土師器片が1点出土したのみである。遺物では陶磁器片が圧倒的に多く、約5割を占める。

1. 土師器(第12図1、写真図版13-1~5)：41点の破片資料が出土した。全てロクロ使用の内黒の环で、内面ミガキが施されている。底部資料で観察可能なものは全て回転糸切後無調整のものであった。

2. 須恵器(写真図版13-13~20)：25点の破片資料が出土した。器種は环、壺、甕等が認められる。甕には、外面に平行印目が加えられるものがある。

3. 土師質土器(写真図版13-6~12)：出土遺物は小破片で、しかも磨滅が激しい為、内黒の土師器以外は、明確に土師器と認定出来る材料がなく、この土師質土器に加えた。器種には、皿、炉明皿、甕、羽釜等がある。

4. 陶磁器(第12図2~6、巻頭写真4~6、写真図版14~18)：138点出土した。2点の燈明皿を除き、他は破片資料である。これらは全て、Ⅲc層を含めた上層で出土した。產地別では、輸入品(中国)、常滑、美濃、瀬戸、志野、肥前、相馬、堤等があり、この内相馬焼が全体の約半分を占め最も多く、次いで堤焼、肥前焼の順である。時代的には鎌倉後半から明治以前の近代のものまで認められるが、この内、幕末から明治にかけてのものが多い。Ⅱb層以下の出土のものは全て東北以外のもので江戸時代以前の作である。Ⅳ層以下のものはわずか2点しか出土していない。1点はⅢc層出土の中国産の青磁(巻頭写真4-1)で、他の1点はⅢb層水田跡作土出土の常滑産の甕(巻頭写真4-2)である。両者とも13世紀末から14世紀頃のものと考えられる。

5. 瓦(第13図1、写真図版19-1)：半瓦と丸瓦の破片資料が11点出土した。全てⅡa層を含めた上層で出土した。いずれも近世瓦である。

6. 人形(第13図2、写真図版18-3~5)：Ⅱa層より3点出土した。堤焼の人形で、全て破片資料である。

7. 石製品(第13図3~5、第14図1、写真図版19-2)：4点出土した。全てⅡa層出土である。3は硯で上下端を欠失している。両側面、裏面には摩痕が顕著に残る。4-5は厚さ0.5cm以下の扁平な石の破片で、表裏面・側面に擦痕が認められる。1は小円礫であるが、全面に磨

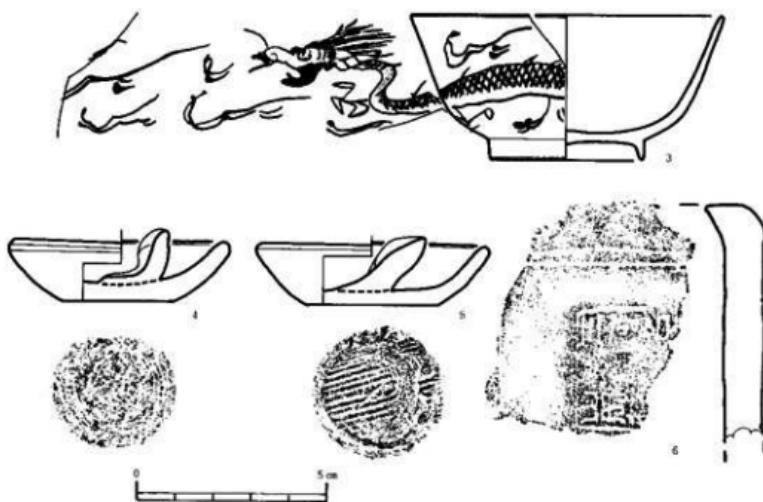
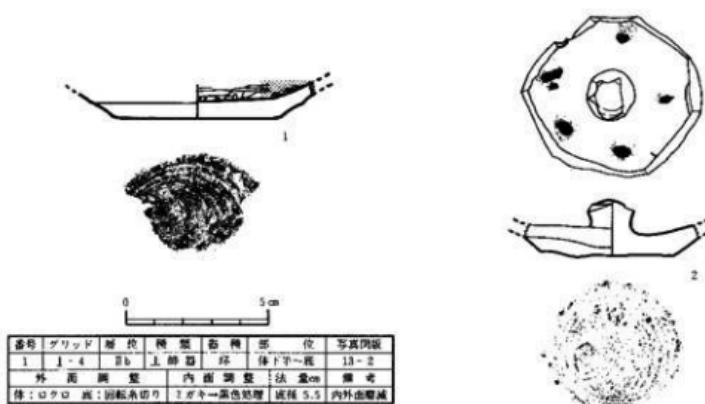
痕が認められ、表面中央部に1ヶ所敲打痕が残る。

8. 金属製品(第32図3~9、写真図版19-3~9):12点出土した。全て破片資料で、II b層を含めた上層で出土した。2は寛永通宝で初鑄年は寛文8年である。II a₂層の出土である。4~5は煙管の一部で5は雁首部、4は吸口部である。6は刀子類の可能性がある。他は不明である。

第2表 出土遺物総数量表

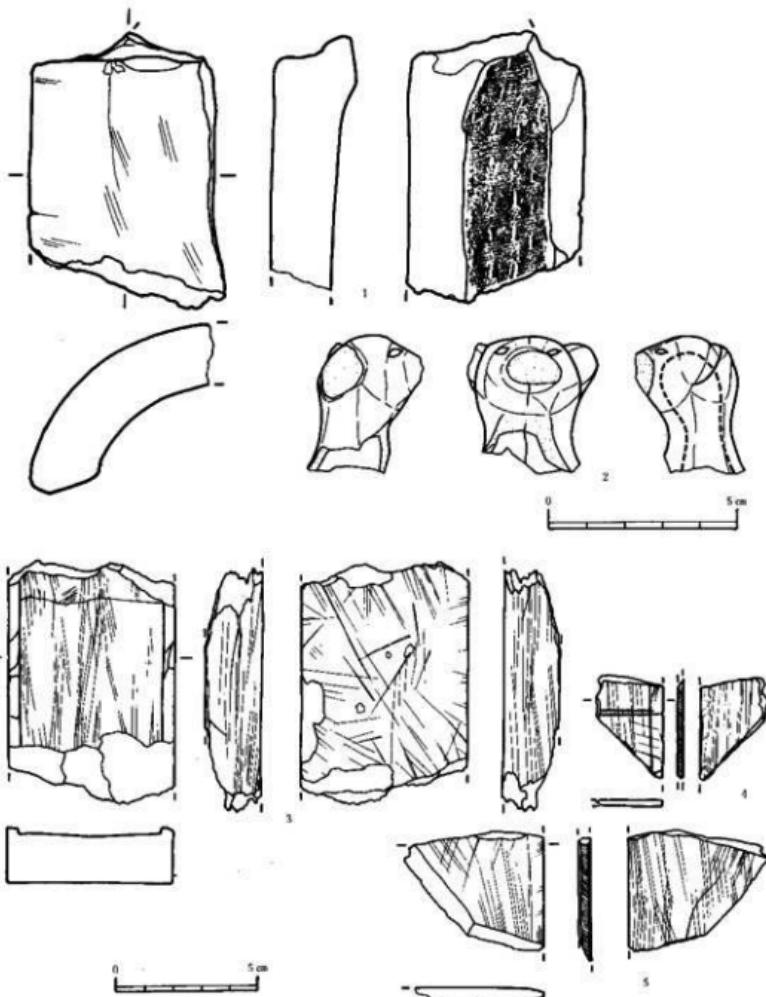
地 区 名	層位	七輪器	造形器	土師質 土 器	出 土 遺 物										金 属 製 品	ガラス 製 品	骨	小計	地 区 合		
					青	白	店	酒	盃	或	漆	漆	瓦	肥	烟	不	灰	人 形	石 製 品		
D-19	II b	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1		
	I	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3		
E-24	II a	2	2	-	-	-	-	-	1	-	1	1	-	-	-	-	-	1	1		
	II b	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9		
F-4	I	2	2	1	-	-	-	-	-	1	5	1	1	1	-	-	1	1	16		
	II a	6	2	2	-	-	-	-	-	1	2	1	2	2	-	-	-	-	16		
G-4	II b'	6	3	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	17		
	II a	2	1	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2		
H-4	II a	2	1	2	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9		
	II b'	2	3	2	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7		
I-4	II a'	3	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6		
	II b	1	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5		
J-5	I	-	3	-	-	1	-	-	-	-	2	2	-	-	-	-	-	1	9		
	II a	1	3	-	-	-	-	-	-	1	4	1	1	-	-	-	-	-	11		
K-5	II b	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6		
	II b	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2		
L-23	I	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1		
	I	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	5	1	-	-	-	-	-	9		
L-24	II a	-	3	-	-	-	-	-	-	1	1	4	-	1	-	-	-	-	11		
	II a	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1		
L-25	II a	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1		
	J-23	II a	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2		
J-24	II b	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1		
	II b	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2		
L-29	II a	-	1	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	4		
	I	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1		
J-29	II a	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	1	-	2		
	II a	-	3	-	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-	6		
O-13	II a	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1		
	II b	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	2		
O-18	II a	1	3	-	-	1	2	-	1	10	3	2	-	-	-	-	-	-	29		
	II a	1	1	-	-	-	-	-	1	1	1	-	-	-	-	-	1	-	32		
O-23	II a	-	7	-	-	1	-	-	3	7	4	4	2	-	-	2	-	-	30		
	II b	-	1	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	33		
P-28	II a	-	2	-	-	2	-	-	4	9	1	6	1	-	-	1	-	-	26		
	X-13	II a	-	-	-	-	-	-	-	2	2	-	-	-	-	-	-	-	4		
V-17	II c	-	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1		
	W-16	II a	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1		
Y-17	II b	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1		
	Z-18	II a	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	2		
共 合	II b	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4		
	合 计	41	25	56	1	2	1	9	2	1	37	48	19	34	11	3	4	12	3	290	
層 位 別																					
I		2	2	5	-	-	1	-	-	1	2	9	1	11	3	-	-	1	1	-	39
II a		1	1	3	-	-	1	-	-	-	1	2	-	-	4	1	-	-	-	38	
II a		9	3	8	-	-	-	-	-	-	1	3	3	5	3	-	-	1	1	-	12
II a		5	4	19	-	-	4	2	3	-	12	25	13	16	5	2	3	4	1	-	126
II b		2	3	5	-	1	1	3	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	18
II b		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
III b・III b'		11	6	9	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	26
II c		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
II a・II a'		5	2	8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	15
四 類		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
五 類		5	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11

*陶器器: 青一中国青磁、常一常滑、唐一唐津、美一美濃、瀬一瀬戸、志一志野、肥一肥前、精一相馬、不一越地不明



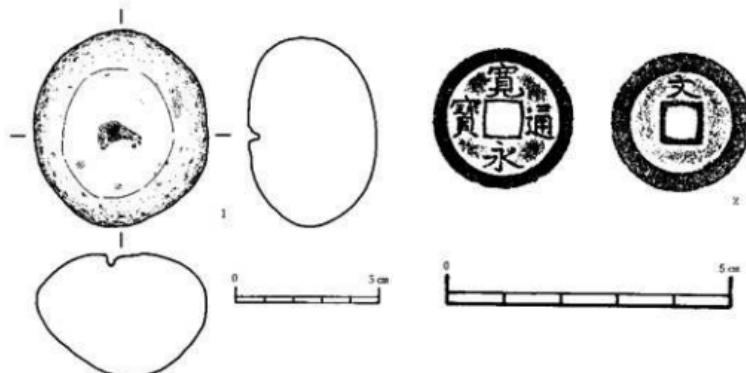
番号	地 区	層位	種類	器 形	部 位	產地	年 代	外 面	内 面	施 槽	施 織	施 老	参考文書
2	I - 24	1	陶器	土瓶蓋?	作	~	鏡	相馬	物	利	織	無	5 - 8 16 - 2
								白化織縫(跡)	(山水名)				回転名切縫。
													織縫點。
3	O - 18	Ea	陶器	鉢	口縁~合	不明	幕	東	?	染付	(周文)	質入。	6
4	J - 29	Ba	陶器	深 扇 盆	山縫~	底	堺	幕末~明治	鉢	織	底面回転名切縫。	織縫	品受け有り。
													完形。
5	I - 24	Ba	陶器	復 明 盆	口縫~	底	堺末~明治	鉢	織	底面回転名切縫条縫。	織縫	品受け有り。	口縫 部欠失。
													18 - 1
6	O - 18	Ba	陶器	鉢	?	口縫~	体	不明	幕末~明治?	無			三河窯の可能性有り。
													17 - 12

第12図 出土遺物(土器・陶磁器)

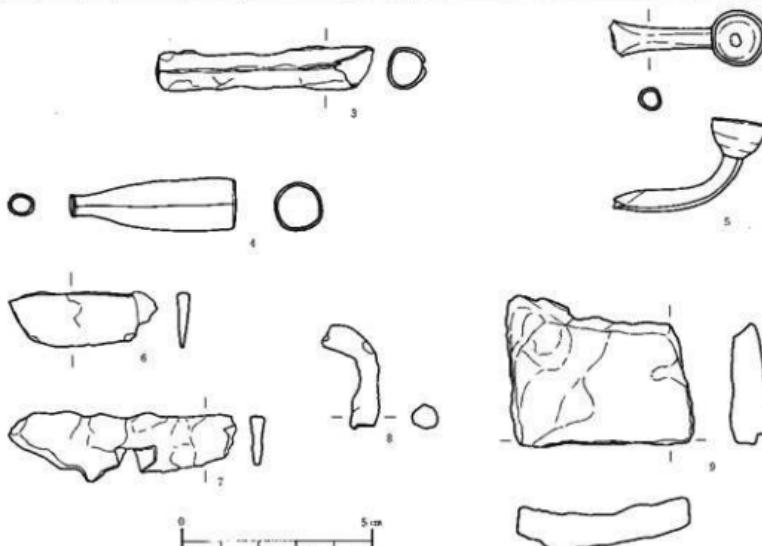


番号	地 区	場 位	種 類	凸 凹 滑 滅			側 面 周 長	厚 度	考
				部	位	地			
1	E - 24	I 九	瓦	翫紋ナデ	布	日	唐三瓦	—	19- 1
2	F - 29	II a	人 形	類	堤	基末~明治	丸?	—	写真同前
3	Z - 18	II a	石 製 品	種	部	—	多方面。側面直線。底脚1段。裏面・周側面滑れ。	—	19- 2
4	J - 23	II a	石 製 品	—	(3.3)	(2.2)	0.15	スレート	—
5	O - 4	II a	石 製 品	—	(4.0)	(4.9)	0.6	スレート	裏面直・側面擦痕。

第13図 出土遺物(瓦・人形・石製品1)



番号	地 区	器種	種類	部 位	法 寸 cm	材 質	考	写真回数
1	E - 24	石 製 品	一	長さ 6.9 幅 6.1 厚さ 4.7	—	安 山 石 全表面磨拭。表面中央に高文打痕。	—	—
2	O - 18	石 製 品	瓦 小通寶	初 銘 年 (西暦)	慶 宝 8年 (1668)	石	新窓小鏡。正字文。	19 - 3



番号	地 区	器種	種類	部 位	法 寸 cm (内寸) (外寸)	材 質	考	写真回数
3	O - 19	金 属 製 品	一	長さ 5.7 幅 1.1	—	鐵	質状。	—
4	O - 22	鐵 壷	壺	長さ 4.5 幅 1.25	—	鋼?	壺口端部径 0.5 cm。	19 - 7
5	I - 4	鐵 管	管	長さ 4.1 直径 0.5	—	鋼?	大細外径 1.2 cm。	19 - 8
6	D - 19	刀 手?	刀~某?	長さ 4.0 幅 1.5 厚さ 0.3	—	鐵	刀口有刃。	19 - 6
7	I - 4	金 属 製 品	一	長さ 6.1 幅 1.8 厚さ 0.2 - 0.4	—	鐵	下端中央部に缺刃。	19 - 5
8	O - 22	金 属 製 品	一	長さ 2.8 幅 0.5	—	鐵	「L」字状に磨き、断面凹形。	19 - 4
9	I - 29	金 属 製 品	一	長さ 4.0 幅 4.5 厚さ 1.0	—	鐵	板状。中央切欠。	19 - 9

第14図 出土遺物(石製品2・金属製品)

第V章 考察とまとめ

1. 検出遺構の所属年代

- (1) **III b 層水田跡**: 作土 (III b 層) 及び水田外部分 (III b' 層) より28点の出土遺物があった。内訳は、土師器2点、須恵器6点、土師質土器5点、陶器1点、骨1点で、全て細片である。この内、所属時期が比較的明確で、最も新しいものとしては、陶器片が1点上げられる。この陶器片 (巻頭写真4-2) は、常滑産の壺の体部資料で、鎌倉後半から南北朝頃のものと考えられる。次に III b 層水田跡を挟む上下層の出土遺物をみてみたい。下層である III c 層からは、わずか1点ではあるが中国産の青磁片が出土している。この青磁 (巻頭写真4-1) は、竜泉窯系のもので、輸入年代は、III b 層出土の陶器片とほぼ同じ頃と考えられる。上層の III a 層では、須恵器片1点出土したが、下層からの混入遺物である。さらに上層の II b 層では、最も新しい時期のものとしては、江戸時代初期、あるいは後半 (写真図版15-2) 頃の陶磁器片が出土しており、当層は、近世頃の形成層と捕えられる。従って、III b 層水田跡の所属年代は、鎌倉時代後半～南北朝以降から近世に至らない時期、すなわち中世後半に位置づけられる。
- (2) **IV a 層水田跡**: 作土 (IV a 層) 及び水田外部分 (IV a' 層) より15点の出土遺物があった。内訳は、土師器5点、須恵器2点、土師質土器8点で、全て細片である。土師質土器としたものの中には、平安時代末、あるいは中世に埋め込まれた可能性のあるものもあるが、細片のため明確に言及できない。これを挟む上下層の内、下層では、VI層で (IV b ~ VI層まで無遺物) ロクロ使用の土師器の环が1点出土したのみである。この層には、10世紀前半の降下とされる灰白色火山灰が含まれている。上層では、前述 III c 層より鎌倉時代後半から南北朝頃の青磁片が出土している。従って、IV a 層水田跡の所属年代は、平安時代後半より中世前半頃までの年代が与えられるが、上限の時期に関しては、より新しくなる可能性もある。
- (3) **その他**: III a 層上面で土壤が3基検出されている。いずれも出土遺物はない。この土壤の所属年代を考える前に、II a の年代について触れておきたい。II a 層は $a_1 \cdot a_2$ に分層される。陶磁器片の年代、ガラス製品(全て明治以降)の有無により、 a_2 層は幕末から明治、 a_1 層は明治以降より I 層が形成されるまでの年代が与えられる。さて、3基の土壤であるが、いずれも II 区で検出され、堆積土は互いに酷似している。このことより3土壤は、ほぼ同時期のものと考える。また、堆積土の状況より、人為的に埋め戻されたことが想定される。II区の調査に際しては、III b 層水田跡検出に重点を置いたため、III a 層上面までの堆積土は重機により行った。従って、これら土壤は、III a 層形成以降のどの時期に属するかは明確にすることはできなかった。

註：東北大学農学部山田一郎氏より、多賀城跡出土の灰白色火山灰と同一のものであるとの御教示を得た。白鳥良一氏は、この灰白色火山灰の降下年代を10世紀前半頃としている。白鳥良一「多賀城出土土器の変遷」『研究紀要』第 宮城県多賀城跡研究所

2. 水田跡について

III b 層水田跡とIV a 層水田跡の畦、水口、1区画、作土、水路の特徴を比較した場合（第3表）、多くの共通点が認められる。相違点としては1. 畦の断面形、高さ、交点 2. 1区画の面積 3. 水路の方向、規模が上げられるが、この内の幾つかは、堆積状況、調査面積に起因するものと考えられる。相違点の内、畦の交点に関しては、IV a 層水田跡が5例全て「十」字状であるのに対し、III b 層水田跡は6例中1例が「十」字状で、他は全て「T」字状となっている。II区の一部では、IV a 層水田跡の畦上にIII b 層水田跡の畦が重なりながらも、交点（同一位置）では、異なる畦の取り付け方となっている。これは両水田跡の1区画の形状（規格）、面積に大きな影響を与えたものと考える。ただし、今回の調査では、IV a 層の水田跡で1区画のみが明確にされただけであり、現状では両者の1区画の形状、面積に関しては、余り多くは語れない。しかし、畦交点の差異から、下層の水田跡の方が上層の水田に比べ整然とし、尚且つ1区画の面積も小さかったことが推測される。仙台市南東部に位置する後河原遺跡では、中世（後半）に位置づけられる水田跡が検出されている。この遺跡では、水田1区画の明確な規模は把握できなかったが、長辺、短辺、あるいはどちらか一方の判る例としては、全て16m以下であった。これに比べると当遺跡は、両水田跡とも1辺の長さが大きい。また、II区では両水田跡とも作土底面が緩やかではあるが傾斜している。もし、水田の耕作深度が同一のものと仮定するならば、両水田跡の検出区画内に水を均一に張ることは、並大抵のことではなかったと思われる。このような状況を踏まえると、当時、この1区画内にさらに細い小区画を設けていたことも考えられる。

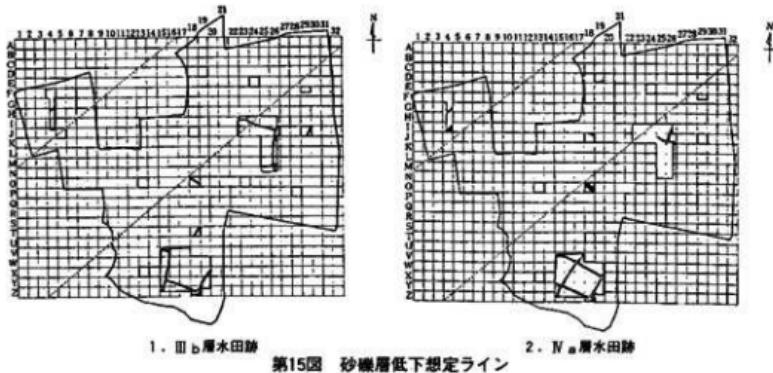
第3表 III b 層水田跡とIV a 層水田跡の比較

本田名		III b 層水田跡	IV a 層水田跡
畦	A	北→南→北東→南東〔北北東→南南西が中心〕 N=5°~47°~E	北→南→北東→南東〔北北東→南南西が中心〕 N=10°~70°~E
	B	西→東→西北西→東南東 N=56°~96°~W	西北西→東南東 N=38°~72°~W
	土 壤	作土と同一	作土と同一
	断 面 形	直線状。下端の盛りの少ない張状。	台形状。下端の盛りの少ない張状。
	規 模	作土上の高さ 0~10cm前後（平均8cm） 上端幅・作土上幅 約30~60cm（約40cm）~約75~90cm（約80cm）	0~10cm（約5cm） 約50~70cm（約55cm）~約80~90cm（約80cm）
	交 点	「T」字状、「十」字状。	「十」字状
水 口	位 置	畦交点付近	畦交点付近
	底 面 の 高 さ	未記のため不明	作土上面より高いものと低いものがある
	形 状	方形状	正方形状
1区画	1辺 の 幅 像	約18~20m	約18m
	面 積	約400 m ² 以上（II区）	約300 m ²
	厚 さ	15cm前後	15cm前後
作 土	底 面 状 態	ほぼ平坦	ほぼ平坦
	底 面 傾 斜	Ⅱ区 南南西→北北東に緩やかな下り傾斜 Ⅲ区 北→南に緩やかな下り傾斜	Ⅱ区 南南西→北北東に緩やかな下り傾斜 Ⅲ区 北→南に緩やかな下り傾斜
	作 土 下 穀 分 布 様	部分的に有り	部分的に有り
水 路	方 向	畦口に向	畦A・B両方向
	取 り 付 ケ 部 分	岐中央	岐中央
	規 模	上端幅・下端幅 約50cm・約20cm	約60~80cm・約30~40cm
	深 度	約15cm	約30cm
	断 面 形	「U」字状	「U」字状
	底 面 状 態	凹凸状	凹凸状

南北文字のものは、その内でも最も多く中心的なものである。

畦は南北上、南北方向を基準とするものをA、東西方向を基準とするものをBとした。

第15図1・2の破線内は、砂礫層(XI層)の深度が増す部分を想定したラインである。このラインは、旧河道面(写真図版1-1)とほぼ一致し、旧河道面と砂礫層の低下は相関関係にあり、当遺跡の砂礫層の低下部分が旧河道方向と考える。この旧河道方向と両水田跡の畦方向は、ほぼ平行、あるいはほぼ直交方向となっており、下層IVa層水田跡においてはより顕著である。これは下層の水田跡ほど地形的制約を受け、あるいは逆にそれを利用し水田の畦方向が決定されたものと考える。また、調査区北西端のIII区では、両水田跡とも水田外部分が認められており、水田域が両水田經營期間内には広域に拡がっておらず、旧河道面に沿って拡がっていたことが想定される。このような畦方向、水田域のあり方は、前述後河原遺跡とよく似ているといえる。従って、当時の水田の畦方向、水田域のあり方は、その時代の地形的条件により、大きく左右されていたものと考える。



第15図 砂礫層低下想定ライン

3. まとめ

1. 欠ノ上I遺跡は、名取川・広瀬川に挟まれた、標高7.5~8mの後背湿地に立地する。
2. 検出遺構には、平安時代後半~中世前半の水田跡、中世後半の水田跡、中世後半以降の土壙3基がある。
3. 両水田跡とも1区画が大きく、さらに内に小区画が設けられたことも考えられる。また、水田1枚の形状は不明な点が多いが、畦の取り付き方より下層の水田跡(IVa層)の方が上層の水田跡(IIIb層)に比べ整然としていたことが推測される。
4. 両水田跡の畦方向、水田域のあり方が旧河道面と相関関係を示すことより、両水田跡の畦方向、水田域が、地形的条件によって制約を受けていたことが窺える。

付章 仙台：欠ノ上Ⅰ遺跡土壤のプラント・オパール分析

大分短期大学 佐々木 章

宮崎大学 藤原 宏志

1. はじめに

青森県垂柳遺跡で水田跡が検出され、弥生時代に入ると東北地方にも水田イナ作が伝わっていったことが明らかとなった。その後、仙台市富沢水田遺跡でも弥生時代の水田跡が検出されるなど東北地方の水田イナ作についての知見が増えつつある。今回、富沢水田遺跡を流れる荒川の下流域で、名取川と広瀬川の合流点に近い欠ノ上Ⅰ遺跡土壤のプラント・オパール分析の機会を得たので結果を報告する。

2. プラント・オパール分析法

分析に用いる機動細胞プラント・オパールは、イネ・ヨシ・タケなどイネ科植物の葉身中に存在する珪化機動細胞に由来する土粒子である。そのため埋没水田土層中には、そこで生産されたイネに由来するイネ機動細胞プラント・オパールが多量に含まれている。土壤中のプラント・オパール密度を求める手順を第16図に示す。プラント・オパールは分解しにくく、植物体中の珪化機動細胞量もほぼ定まっている（第4表）。土壤中のプラント・オパール量を植物体量に換算することができる。

3. 分析結果・考察

遺跡土壤中の機動細胞プラント・オパール密度を植物体量に換算した結果を第17・18図に示す。結果は面積10a、厚さ1cmの土壤中に含まれる機動細胞プラント・オパールに相当する植物体の地上部乾燥重量（t）で示してあり、年間収量ではない。

当時穗刈が行なわれており、土壤の移動なかったとすれば葉身だけにある珪化機動細胞の全量がその土層中に残されていることになるので、分析結果は生産された植物体の地上部乾重に相当する。イネについては、生産されたであろう桿量も合わせ示した。

層位ごとの推定年代はⅡb層が江戸時代、Ⅲb層が中世後半、Ⅳa層が平安後半から中世前半の水田層で、Ⅶ層には平安中期頃の灰白色火山灰が含まれるとの事である。

P-28地点ではⅧ層までイネ機動細胞プラント・オパールが検出され、Ⅰ層以外にⅡb層とⅣa層にピークが認められる。Ⅱb層全体中のイネ機動細胞プラント・オパールは、8.0t/10aのイネ穀を生産できるイネ量に相当する。Ⅲb層では1.1t/10a、Ⅳa層では1.9t/10aの穀量に相当する。Ⅰ層からⅧ層までを合計すると41.0t/10aになる。ヨシはⅦ層・Ⅲa層・Ⅱa層などで検出されるが、タケ亜科も全層にわたって検出されている。比較的水分の多い環境であったと考えられる。

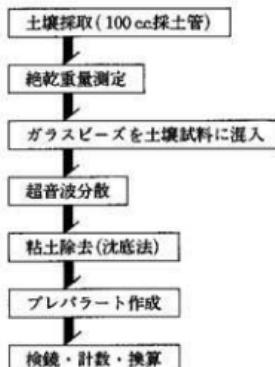
E-24地点ではⅡa層で2.9t/10a、Ⅱb層で3.3t/10aの畠に相当するイネ機動細胞プラント・オパールが検出された。この地点では、ヨシも検出されない。かんがい水にたよる乾田であった。

J-5地点では種層から、ごく少量のイネ機動細胞が検出されている。近所でイネが栽培されていたであろう。イネのピークはⅡb層、Ⅲe層、V層に認められる。Ⅱb層では24.2t/10a、Ⅲ層全体で5.3t/10a、Ⅳa層で2.3t/10a、V層で5.5t/10aの畠に相当する。全層を合計すると83.2t/10aになる。ヨシ機動細胞プラント・オパールは、I、Ⅱa、Ⅲ、V、Ⅴ層などで検出されている。タケ亞科機動細胞プラント・オパールは、全層にわたって検出されるので、低湿地とはいえないが、比較的に水分の多い環境であった。V層を使って水田イナ作を始めたとすると、当時、湿田に近い状態であったのかもしれない。Ⅳa層は、ごく近所で水路や畦畔が検出されている。Ⅱb層になるとイネも急に増加し、ヨシも検出されない。この時期には乾田化がすんでいたことを示している。

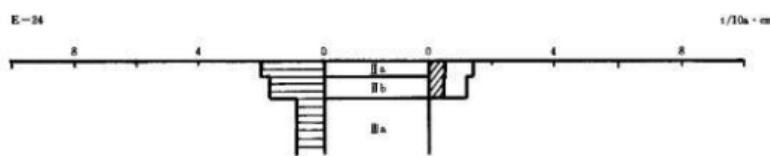
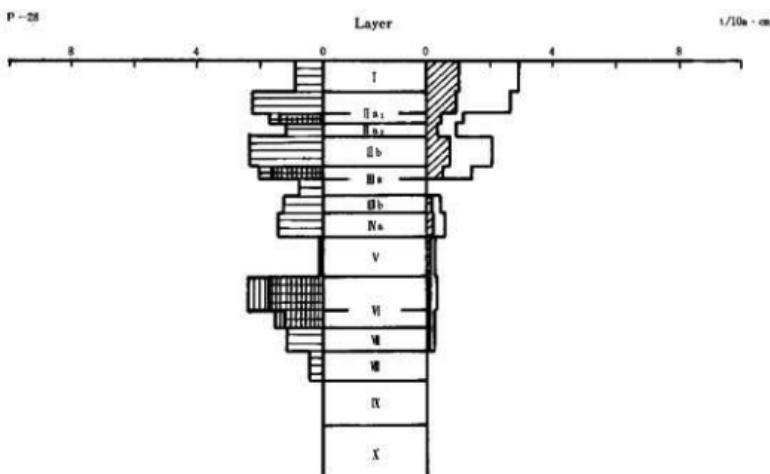
Z-18地点では、Ⅱb、Ⅲb層にイネのピークが見られ、それぞれ8.9t/10a、7.1t/10aの畠に相当する。Ⅲb層までの合計は45.3t/10aになる。Ⅳa層では畦畔が検出されているにもかかわらず、イネ機動細胞プラント・オパールは検出されない。ヨシが全く検出されないので、かんがいをしなければ水田にはできない環境である。苦労して水田にはしたもの、イネは育たなかったのであろうか。今回分析している間にキビ族の機動細胞に類似したプラント・オパールを検出した。I、Ⅱa₂、Ⅱb、Ⅲb、Ⅳaなどに多い。キビ族植物の機動細胞の細分は、研究中で詳らかでないので同定できない。しかし、キビ族にはキビ・アワ・ヒエなど種類が含まれている。同定のための研究を急ぎたい。その結果によってはヒエ田の可能性を考慮する必要があろう。

		$\times 10^6$ 個/g
イネ	<i>Oryza sativa</i>	3.40
ヨシ	<i>Phragmites communis</i>	1.44
ヒエ	<i>Echinochloa Crus-galli</i>	0.233
ゴキダケ	(<i>Bambusaceae</i>)	20.83
ススキ	<i>Misanthus sinensis</i>	2.79

第4表 植物体中の珪化機動細胞

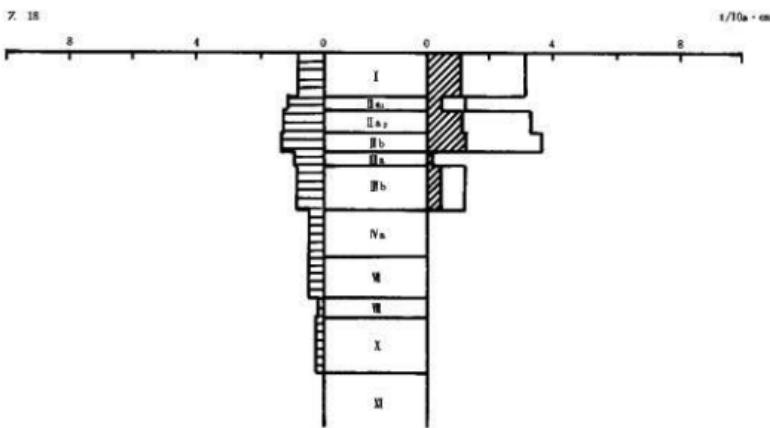
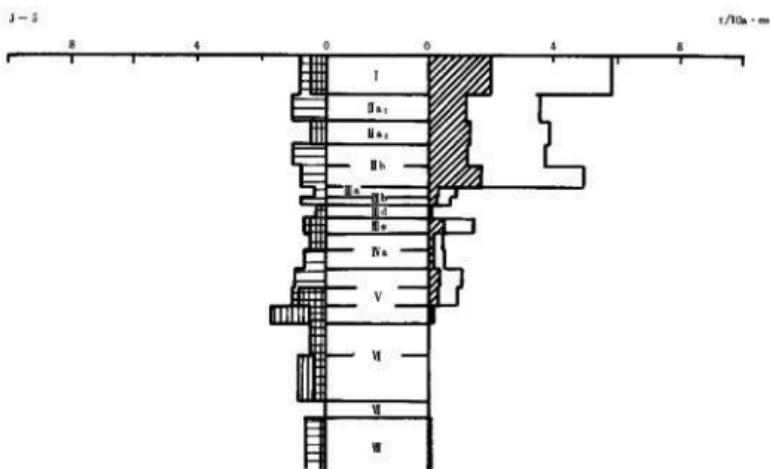


第16図 プラントオパール定量分析手順



□ イネ ▨ イネ穀 ▓ ヨシ ┌ タケ葉群

第17図 プラント・オパールから推定した植物体量(1)



第18図 プラント・オバールから推定した植物体量(2)

以上の結果を総合して考えると、比較的に水分の多いP-28やJ-5地点では、平安時代中期前後頃に水田イナ作が行なわれ始め、平安後半～中世前半にはほぼ安定したのであろう。この時期までにP-28地点で6.5t/10a、J-5地点で8.7t/10a、平均7.6t/10aの穀に相当するイネ機動細胞プラント・オパールが蓄積している。当時穗刈が行なわれていたとすると、これはイネ穀の収量の合計にある。株刈であれば、機動細胞を含む葉身は、穗と共に圃場外に持ち出されるので、プラント・オパールとして残るのは一部にすぎない。この場合、実際の収量は約20倍の150t/10a程度という事になる。堆肥などとして圃場にもどしておれば、その中間的な収量という事になる。

中世後半ころにかけてZ-18地点でも水田イナ作が始まる。Ⅲ層全体で平均5.5t/10aの穀に相当するイネ機動細胞プラント・オパールが蓄積した。株刈だと110t/10aということになる。

江戸時代になると引き続き全域で水田が作られた。Ⅱb層だけで平均11.1t/10aの穀に相当する。株刈だと220t/10aになる。

幕末から明治にかけてのⅡa₂層では平均6.5t/10aであり、株刈なら130t/10aの収量と推定できる。

明治以降、I、Ⅱa₁層の合計は平均27.9t/10aとなる。株刈なら558t/10aと推定できる。

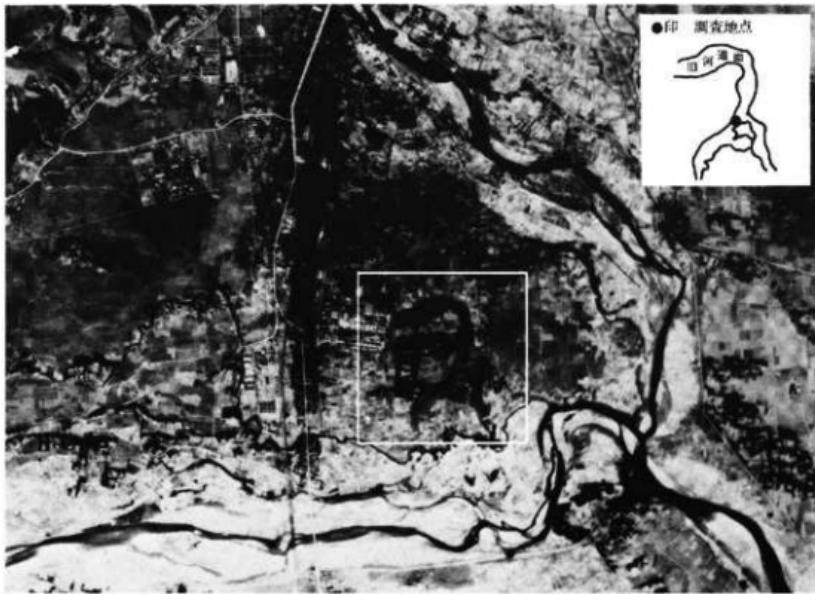
このような例を多数集めていく事によって地方ごとの収量の変遷や栽培管理方法の変遷などを明らかにできよう。

4. 結論

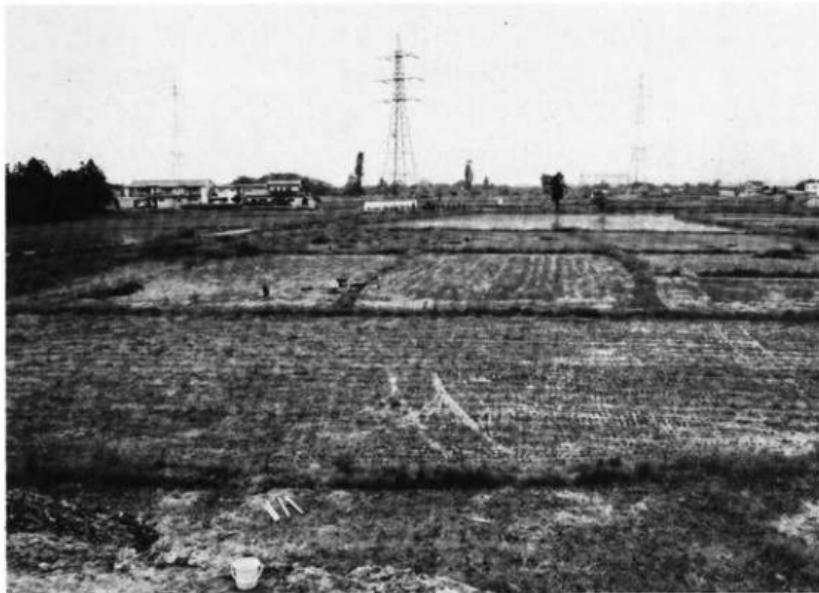
矢ノ上I遺跡土壤のプラント・オパール分析を行なった結果、

- 1) 比較的に水分の多いP-28、J-5地点付近で平安中期前後頃にイナ作が始まった。平安後半～中世前半までに7.6t/10aの穀を生産するに足るプラント・オパールが蓄積された。株刈であれば150t/10aの穀が生産されている。
- 2) 中世後半は、乾燥したZ-18地点でも水田作が始まる。プラント・オパール量を穀に換算すると5.5t/10aに相当する。株刈だと110t/10aになる。
- 3) 江戸時代には引き続き全域で水田が作られた。穀に換算すると11.1t/10aになり、株刈では220t/10aと推定できる。
- 4) 幕末から明治にかけては6.5t/10a、明治以降で27.9t/10aに相当する。株刈ではそれぞれ130t/10a、560t/10aになる。
- 5) Z-18地点のIVa層では畦畔が発掘されているにもかかわらず、イネ機動細胞プラント・オパールは検出されていない。しかしキビ族植物の動機細胞類似プラント・オパールが検出される。属・種レベルの同定はできていないが、ヒエ田の可能性も考慮する必要がある。
- 6) 今後、このような例を集めていく事によって地方ごとの水田イナ作史を解明する手がかりを得ることができる。

写 真 図 版



1. 欠ノ上 I 道路周辺の航空写真 (昭和22年)

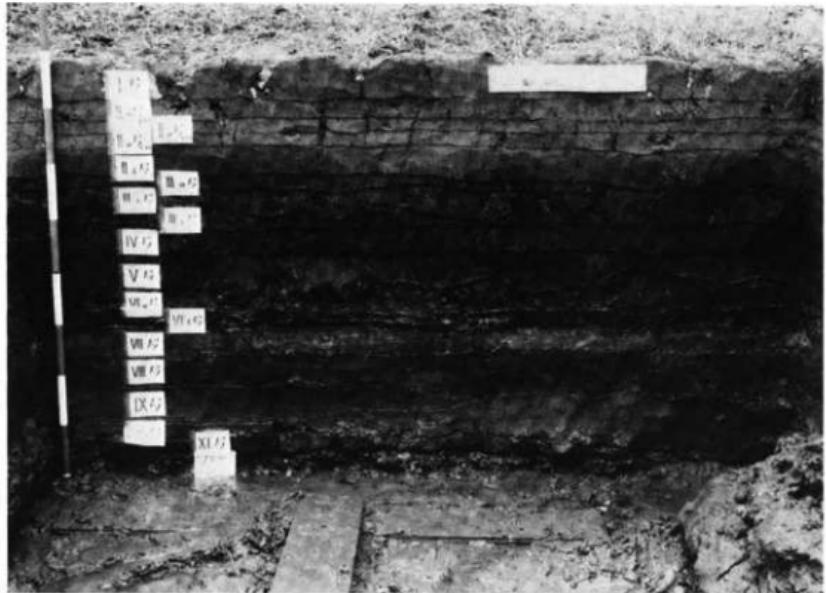


2. 調査対象区全景 1 - 東側 - (北から)

写真図版 1 遺跡全景 1

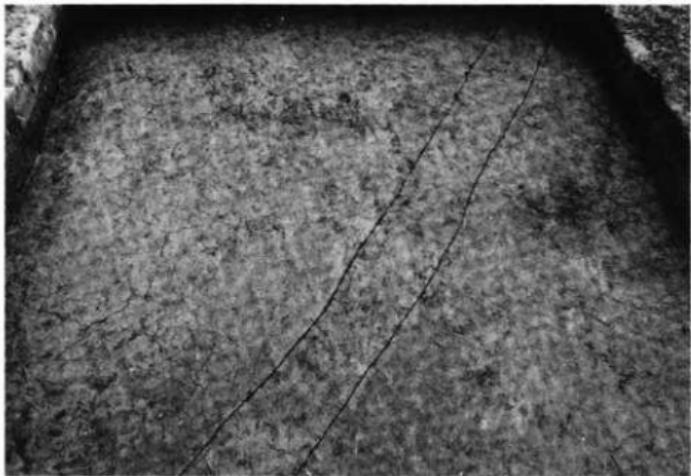


1. 調査対象区全景2—西側—(北東から)

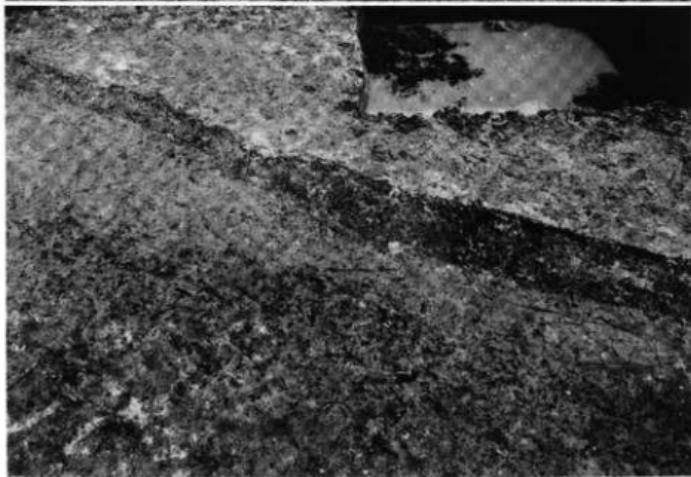


2. P-28グリッド南壁断面

写真図版2 遺跡全景2・基本層位



1. III b 深水田跡検出状況
(東から)



2. IV a 深水田跡水路
(北から)



3. III b・IV a 水田跡
畦・水路断面(東壁)



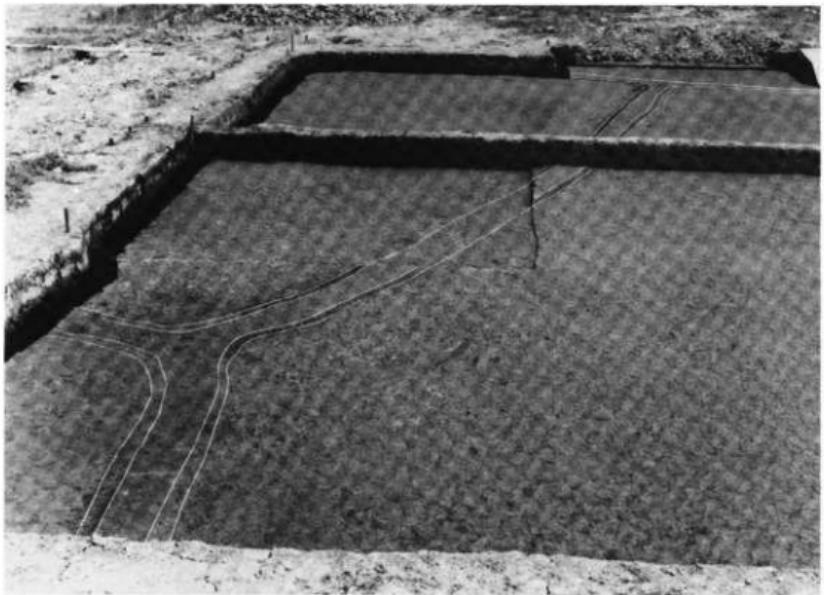
1. M-a 層水田跡堆検出状況
(北西から)



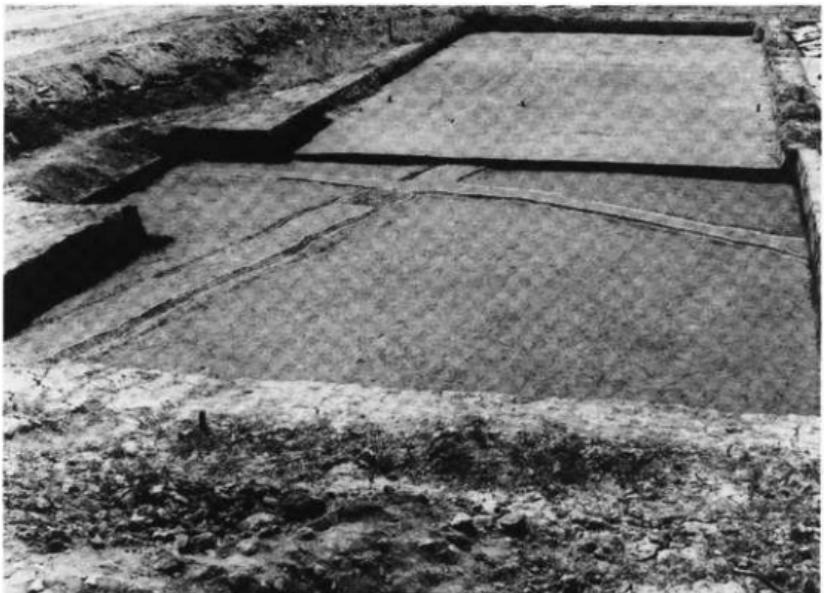
2. M-a 層水田跡作土上面堆
(北西から)



3. M-a 層水田跡堆断面
(東壁)



1. III b 層水田跡作土上面(西から)



2. IV a 層水田作土上面(北から北側は III b 層水田検出状況)

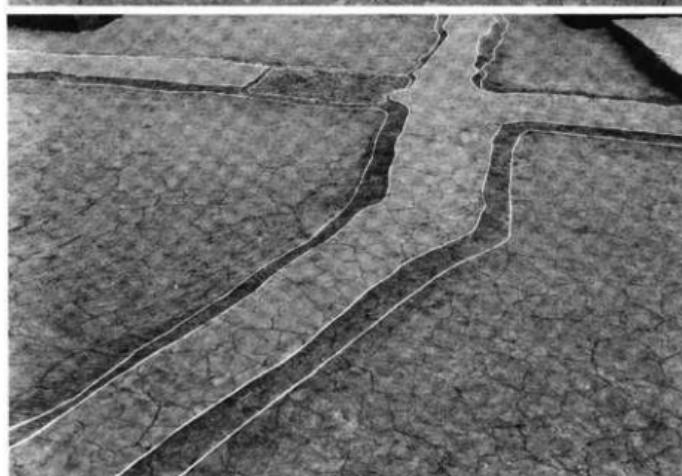
写真図版 5 I 区検出遺構 1



1. M-a層水田跡水口検出状況
(西から)



2. M-a層水田跡作土上面1
(南から)



3. M-a層水田跡作土上面2
(西から)

写真図版 7
Ⅱ区検出造構 1

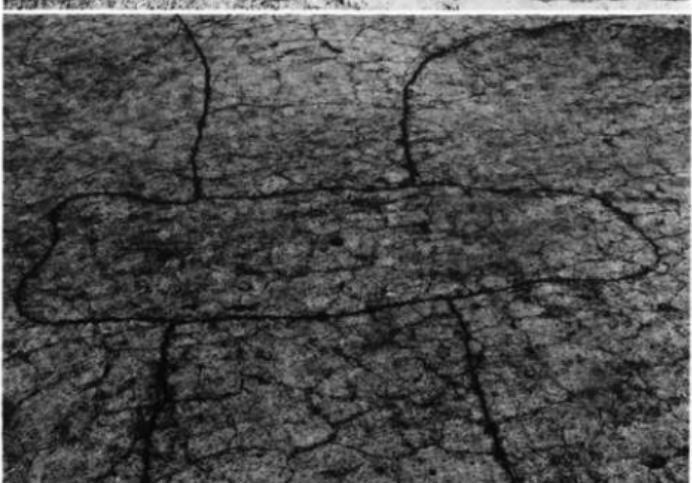
1. Ⅲ b 層水田跡検出状況
(Z-18グリッド北から)

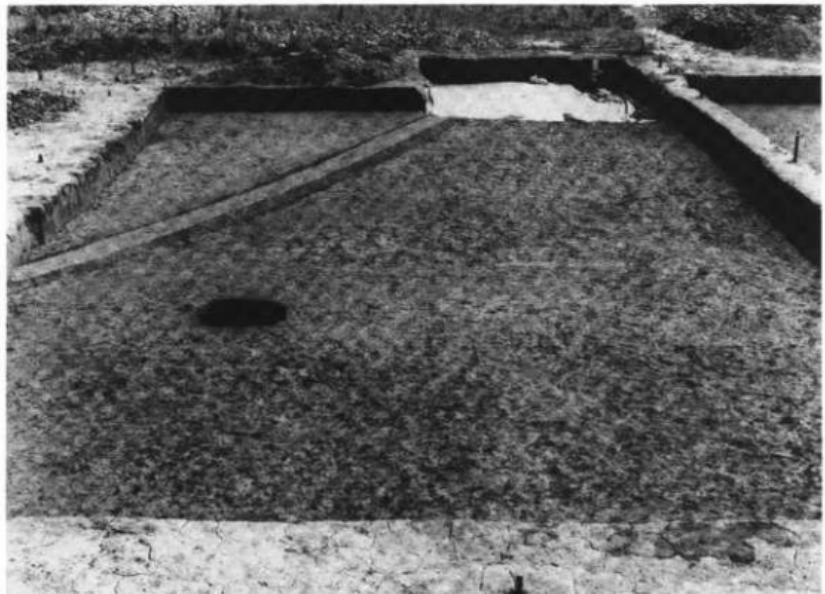


2. M a 層水田跡検出状況
(Z-18グリッド北から)



3. Ⅲ b 層水田跡水口検出状況
(南から)



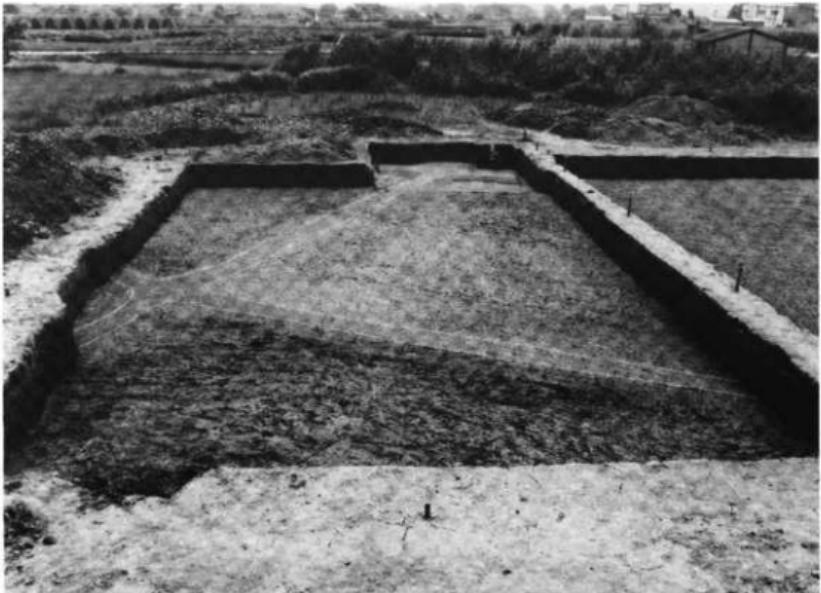


1. III b 層水田跡作土上面—東側—(北より)

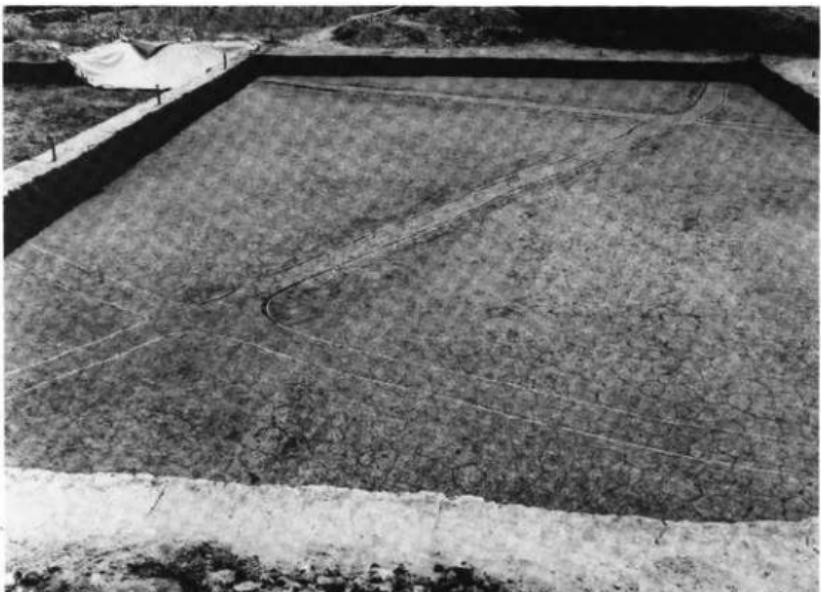


2. III b 層水田跡作土上面—西側—(北より)

写真図版 8 II 区検出遺構 2



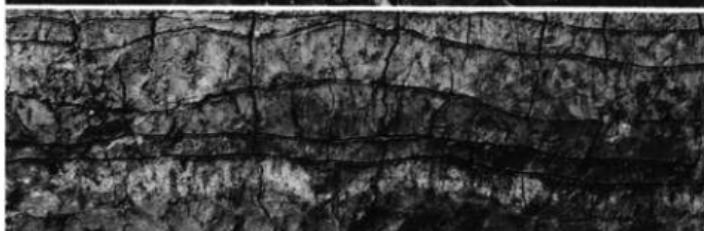
1. M a 屢水田跡作土上面—東側—(北より)



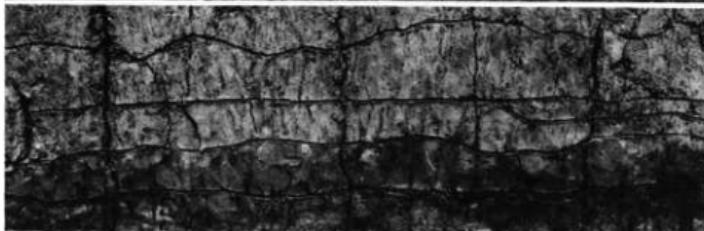
2. M a 屢水田跡作土上面—西側—(北より)

写真図版 9 II 区検出遺構 3

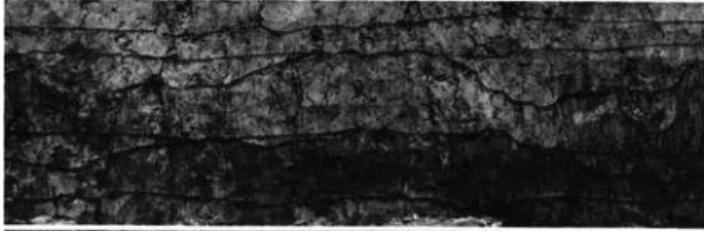
1. III b 層水田跡畦と水口?断面
(V-16グリッド北壁)



2. III b 層水田跡畦断面
(V-17グリッド北壁)



3. IV a 層水田跡畦断面
(W-17グリッド東壁)



4. III b・IV a 層水田跡畦断面
(Z-17グリッド東壁)



5. III b・IV a 層水田跡畦断面
(Z-15グリッド南壁)



6. III b・IV a 層水田跡畦断面
(V-15グリッド西壁)

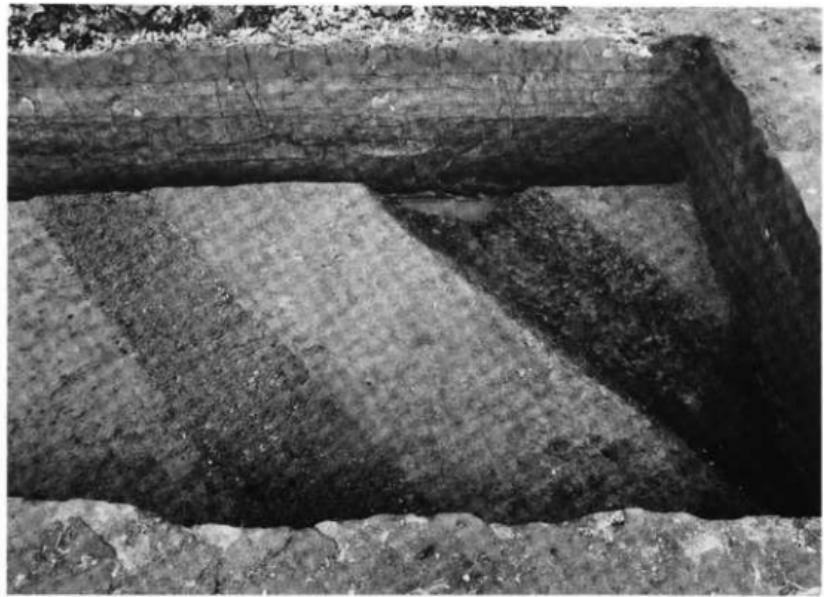


1. M a 層水田耕作土下面 1 (北から)



2. M a 層水田耕作土下面 2 (南から)

写真図版11 III区検出遺構 1

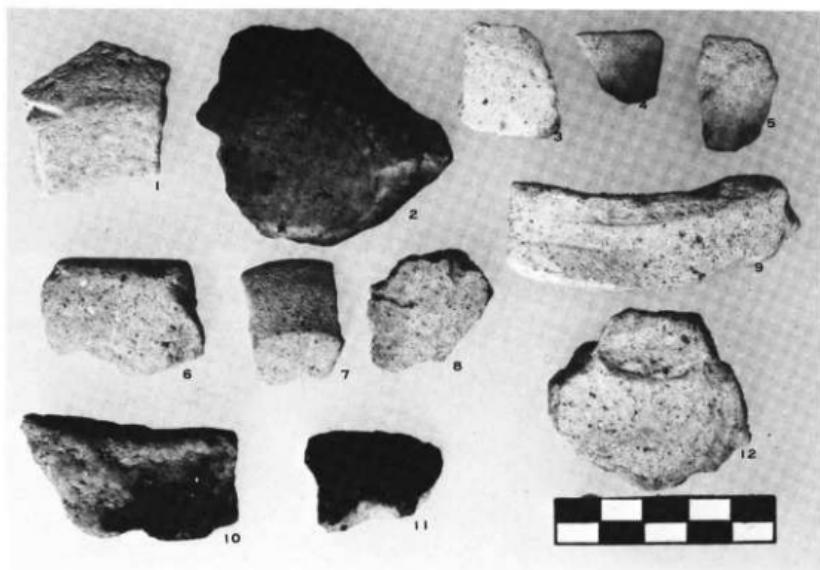


1. III区IV a層水田跡水路



2. 雨水管部分(S-18グリッド) III b層水田跡水路・唯断面(西壁)

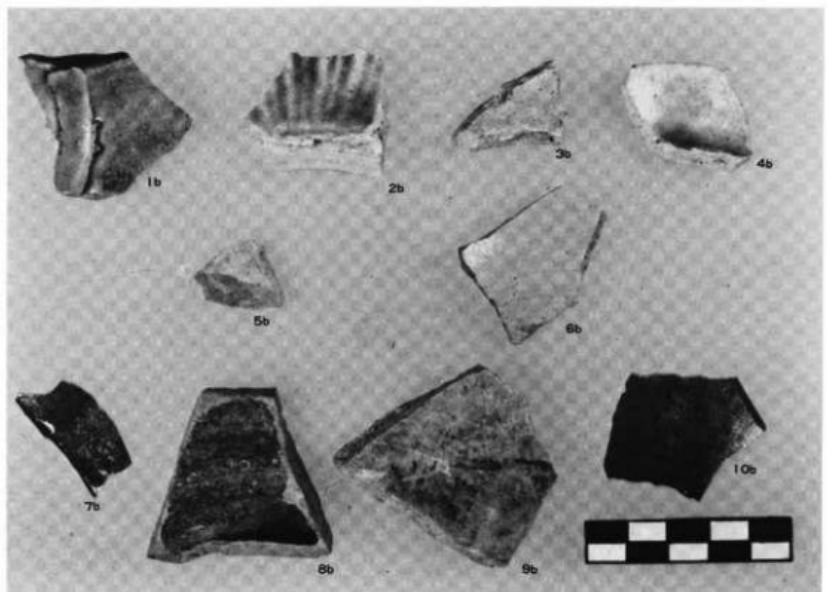
写真図版12 III区検出遺構 2・雨水管検出遺構



病 患 器
写真図版13 出土遺物1

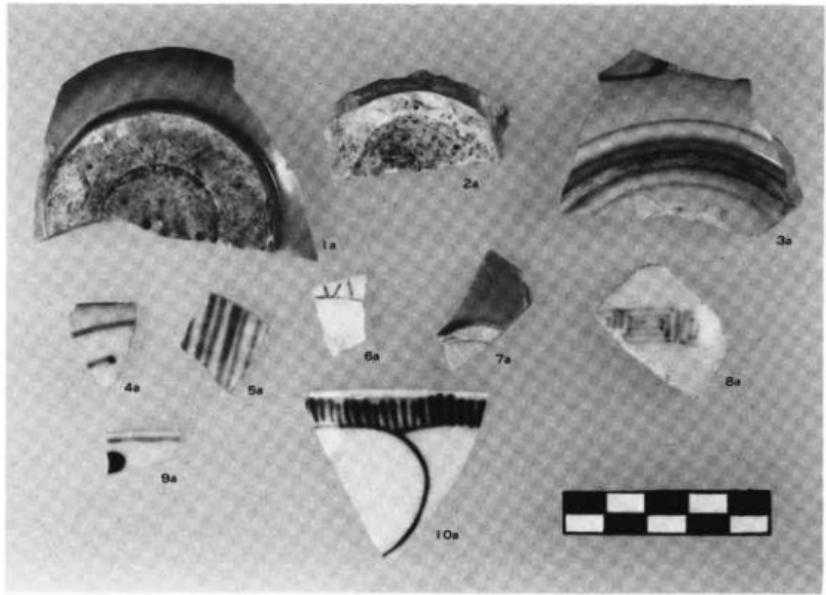


湘戸焼・美濃焼(外面)



湘戸焼・美濃焼(内面)

写真図版14 出土遺物2



肥前焼（外面）



肥前焼（内面）

写真図版15 出土遺物3

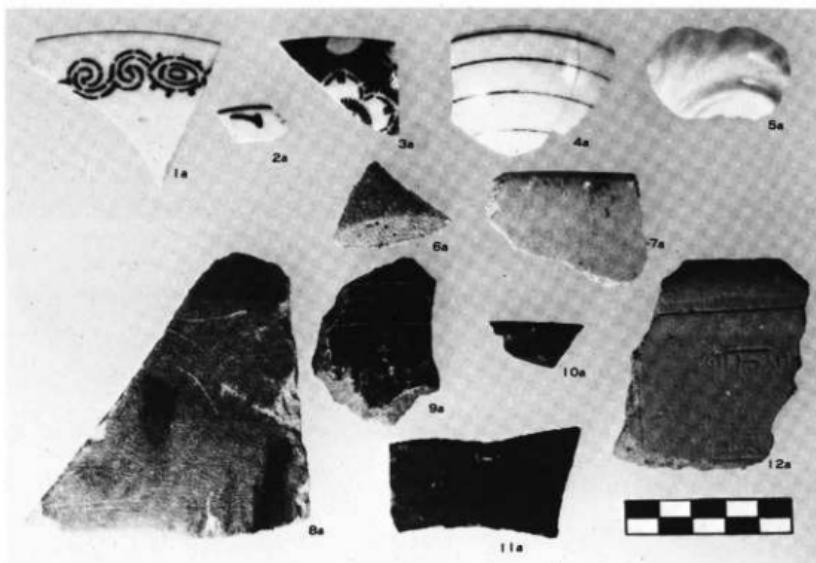


相馬焼（外面）



相馬焼（内面）

写真図版16 出土遺物 4



提燒等（外面）



提燒等（内面）



提 烧



提 人 形

写真図版18 出土遺物 6



瓦 · 瓦



古錢 · 煙管 · 刀子等

寫真圖版19 出土遺物 7

第5表 卷頭カラー図版・写真図版遺物観察表

卷頭カラー図版

文 字 類 型 式	テ リ	場 所	性 質	部 位	施 工	年 代	外 面			内 面			備 考
							施 工	特 徴	發 現 地	施 工	特 徴		
4-1 Y-17	テリ	陶器	病	体	小	國	施合後下→陶	施合	不	無	無	青銅電氣系	
4-2 Y-17	テリ	陶器	病	体	中	國	施合後半→陶	施合	無	無	無	—	
4-3 J-5	テリ	陶器	病	体上半	施	洛	施合後半→陶	施合	無	無	無	—	
4-4 E-24	テリ	陶器	病	体	中	國	16°C→17°C	施合	下平齊体	鉄	無	—	
4-5 F-4	テリ	陶器	病	体	中	國	江戸	施合	石	無	無	風毛野	

写真図版

上部器・須恵器・土師質土器

写真次第	グリッド	場所	施合	性質	部位	外	外			内			備 考
							施合	特徴	発現地	施合	特徴	施合	
1 O-18	電	土	环	环	体下部	体	ロクロ	底:不明	ミガキ一白色記憶	—	—	—	—
3 O-4	電	土	环	环	体	ロクロ	—	黑色記憶	—	—	—	—	—
4 F-4	電	土	环	环	体	ロクロ	—	黑色記憶	—	—	—	—	—
5 O-4	電	土	环	环	体	ロクロ	—	黑色記憶	—	—	—	—	—
6 F-4	電	土	环	环	体	ロクロ	—	黑色記憶	—	—	—	—	—
7 F-4	電	土	环	环	体	ロクロ	—	黑色記憶	—	—	—	—	—
8 O-4	電	土	环	环	体	ロクロ	—	黑色記憶	—	—	—	—	—
9 F-5	電	土	环	环	体	ロクロ	—	黑色記憶	—	—	—	—	—
10 F-4	電	土	环	环	体	ロクロ	—	黑色記憶	—	—	—	—	—
11 O-4	電	土	环	环	体	ロクロ	—	黑色記憶	—	—	—	—	—
12 O-4	電	土	环	环	体	ロクロ	—	黑色記憶	—	—	—	—	—
13 T-25	電	土	环	环	体	ロクロ	—	黑色記憶	—	—	—	—	—
14 F-4	電	土	环	环	体	ロクロ	—	黑色記憶	—	—	—	—	—
15 W-18	電	土	环	环	体	ロクロ	—	黑色記憶	—	—	—	—	—
16 F-4	電	土	环	环	体	ロクロ	—	黑色記憶	—	—	—	—	—
17 Z-18	電	土	环	环	体	ロクロ	—	黑色記憶	—	—	—	—	—
18 F-4	電	土	环	环	体	ロクロ	—	黑色記憶	—	—	—	—	—
19 I-4	電	土	环	环	体	ロクロ	—	黑色記憶	—	—	—	—	—
20 F-4	電	土	环	环	体	ロクロ	—	黑色記憶	—	—	—	—	—

陶器

写真次第	内	外	性質	種	形	様	部	位	施	工	年	外			内	面	施	工	備 考	合 計 写真
												施	工	面						
14-1 O-18	電	陶器	不	明	口縫	体	美濃	中江(昭和)	从	施	西元	灰	灰	入	—	—	—	—	—	5-1
14-2 O-23	電	陶器	角	直	口縫	体	近江	江戸(17C)	裏	施	西元	灰	灰	入	—	—	—	—	—	5-2
14-3 O-23	電	陶器	直	直	口縫	体	近江	江戸(17C)	裏	施	西元	灰	灰	入	—	—	—	—	—	—
14-4 J-5	テリ	陶器	小	直	口縫	体	近江	江戸(昭和)	从	施	西元	灰	灰	入	—	—	—	—	—	—
14-5 P-28	電	陶器	直	直	口縫	体	近江	江戸(昭和)	从	施	西元	灰	灰	入	—	—	—	—	—	—
14-6 J-5	テリ	陶器	直	直	口縫	体	近江	江戸(昭和)	从	施	西元	灰	灰	入	—	—	—	—	—	—
14-7 Z-18	テリ	陶器	直	直	口縫	体	近江	江戸(昭和)	从	施	西元	灰	灰	入	—	—	—	—	—	—
14-8 E-24	電	陶器	小	直	口縫	体	近江	江戸(昭和)	从	施	西元	灰	灰	入	—	—	—	—	—	—
14-9 E-24	電	陶器	直	直	口縫	体	近江	江戸(昭和)	从	施	西元	灰	灰	入	—	—	—	—	—	—
14-10 O-18	電	陶器	直	直	口縫	体	近江	江戸(昭和)	从	施	西元	灰	灰	入	—	—	—	—	—	—
15-1 U-29	電	陶器	直	直	口縫	体	近江	江戸(昭和)	从	施	西元	灰	灰	入	—	—	—	—	—	—
15-2 O-13	電	陶器	直	直	口縫	体	高台	江戸	从	施	西元	灰	灰	入	—	—	—	—	—	—
15-3 O-13	電	陶器	直	直	口縫	体	高台	江戸	从	施	西元	灰	灰	入	—	—	—	—	—	—
15-4 O-18	電	陶器	直	直	口縫	体	高台	江戸	从	施	西元	灰	灰	入	—	—	—	—	—	—
15-5 O-23	電	陶器	直	直	口縫	体	高台	江戸	从	施	西元	灰	灰	入	—	—	—	—	—	—
15-6 O-23	電	陶器	直	直	口縫	体	高台	江戸	从	施	西元	灰	灰	入	—	—	—	—	—	—
15-7 P-28	電	陶器	直	直	口縫	体	高台	江戸	从	施	西元	灰	灰	入	—	—	—	—	—	—
15-8 P-28	電	陶器	直	直	口縫	体	高台	江戸	从	施	西元	灰	灰	入	—	—	—	—	—	—
15-9 P-28	電	陶器	直	直	口縫	体	高台	江戸	从	施	西元	灰	灰	入	—	—	—	—	—	—
15-10 電	直	陶器	直	直	口縫	体	高台	江戸	从	施	西元	灰	灰	入	—	—	—	—	—	—
16-1 O-23	電	陶器	直	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-2 J-5	電	陶器	直	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-3 O-23	電	陶器	直	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-4 I-4	電	陶器	直	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-5 P-28	電	陶器	直	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-6 F-26	電	陶器	直	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-7 O-23	電	陶器	直	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-8 E-24	電	陶器	人	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-9 O-18	電	陶器	直	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-10 J-5	電	陶器	直	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-11 P-28	電	陶器	直	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-12 P-28	電	陶器	直	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-13 J-24	電	陶器	直	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-14 I-24	電	陶器	直	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-15 I-24	電	陶器	直	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-16 I-24	電	陶器	直	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-17 I-24	電	陶器	直	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-18 I-24	電	陶器	直	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-19 I-24	電	陶器	直	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-20 O-23	電	陶器	直	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-21 O-23	電	陶器	直	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-22 I-24	電	陶器	直	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-23 I-24	電	陶器	直	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-24 I-24	電	陶器	直	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-25 I-24	電	陶器	直	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-26 I-24	電	陶器	直	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-27 I-24	電	陶器	直	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-28 I-24	電	陶器	直	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-29 I-24	電	陶器	直	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-30 I-24	電	陶器	直	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-31 I-24	電	陶器	直	直	口縫	体	相馬	幕末	施	青釉	西元	青	青	入	—	—	—	—	—	—
16-32 I-24	電	陶器	直	直																

職 員 錄

社会教育課

文化財調査係

課長	阿部 達	係長	佐藤 隆	上事	吉岡恭平
主幹	早坂春一	主事	田中 則和	・	工藤哲司
		・	結城 慎一	・	渡部弘美
文化財管理係		教諭	菅原 和夫	教諭	渡辺 誠
		上事	木村 浩二	主事	上浜光朗
係長	佐藤政美	・	篠原 信彦	・	斎野裕彦
主事	岩沢克輔	教諭	小野寺和幸	・	長島榮一
・	山口 宏	・	佐藤美智雄	・	及川 格
		主事	佐藤 洋	教諭	千葉 仁
		・	金森 安孝	・	松本清一
		・	佐藤 甲二	派遣職員	高橋勝也

仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物靈巖下セコイア化石林調査報告書（昭和39年4月）
- 第2集 仙台城（昭和42年3月）
- 第3集 仙台市燕沢善光寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）
- 第4集 史跡陰奥園分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
- 第5集 仙台市南小泉古墳群調査報告書（昭和47年8月）
- 第6集 仙台市荒巻五本松古跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
- 第7集 仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
- 第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
- 第9集 仙台市根岸町宗神寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
- 第10集 仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
- 第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
- 第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
- 第13集 南小泉遺跡一範例確認調査報告書（昭和53年3月）
- 第14集 罷跡遠見塚古墳調査報告書（昭和54年3月）
- 第15集 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
- 第16集 六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
- 第17集 北星敷遺跡（昭和54年3月）
- 第18集 桥江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
- 第19集 仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）
- 第20集 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）
- 第21集 仙台市開発関係道路調査報告書（昭和55年3月）
- 第22集 終ヶ峯（昭和55年3月）
- 第23集 年報I（昭和55年3月）
- 第24集 今泉城発掘調査報告書（昭和55年8月）
- 第25集 二神半遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
- 第26集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）
- 第27集 史跡陰奥園分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）

- 第28集 年報2（昭和56年3月）
- 第29集 鶴山遺跡I－昭和55年度発掘調査概報－（昭和56年3月）
- 第30集 山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）
- 第31集 仙台市開発関係遺跡調査報告II（昭和56年3月）
- 第32集 海ノ糸遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
- 第33集 山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
- 第34集 六反出遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
- 第35集 南小泉遺跡－都市計画道路建設工事関係第1次調査報告（昭和57年3月）
- 第36集 北前遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
- 第37集 仙台平野の遺跡群I－昭和56年度発掘調査報告書－（昭和57年3月）
- 第38集 鶴川遺跡II－昭和56年度発掘調査概報－（昭和57年3月）
- 第39集 燕沢遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
- 第40集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報I（昭和57年3月）
- 第41集 乍幌3（昭和57年3月）
- 第42集 那山遺跡－宅地造成に伴う緊急発掘調査－（昭和57年3月）
- 第43集 岩遺跡（昭和57年8月）
- 第44集 沼ノ糸遺跡発掘調査報告書（昭和57年12月）
- 第45集 茂盛・茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告書一（昭和58年3月）
- 第46集 郡山遺跡III－昭和57年度発掘調査概報－（昭和58年3月）
- 第47集 仙台平野の遺跡群II－昭和57年度発掘調査報告書－（昭和58年3月）
- 第48集 史跡遠見塚昭和57年度覆被整備予備調査概報（昭和58年3月）
- 第49集 仙台市文化財分布調査報告I（昭和58年3月）
- 第50集 岩切畑中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
- 第51集 仙台市文化財分布図（昭和58年3月）
- 第52集 南小泉遺跡－都市計画道路建設工事関係第2次調査報告（昭和58年3月）
- 第53集 中山畠中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
- 第54集 神明社遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
- 第55集 南小泉遺跡－青葉女子学園移転新工事地内調査報告（昭和58年3月）
- 第56集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報II（昭和58年3月）
- 第57集 年報4（昭和58年3月）
- 第58集 今泉城跡（昭和58年3月）
- 第59集 下ノ内浦遺跡（昭和58年3月）
- 第60集 南小泉遺跡－倉庫建築に伴う緊急発掘調査報告書－（昭和58年3月）
- 第61集 山上I遺跡II－仙台市体育館建設予定地一（昭和59年2月）
- 第62集 燕沢遺跡（昭和59年3月）
- 第63集 史跡藤原公国分寺跡昭和58年度発掘調査概報（昭和59年3月）
- 第64集 鶴川遺跡IV－昭和58年度発掘調査概報－（昭和59年3月）
- 第65集 仙台平野の遺跡群III－昭和58年度発掘調査報告書－（昭和59年3月）
- 第66集 年報5（昭和59年3月）
- 第67集 富次水山遺跡－第一丁目－泉崎前地区（昭和59年3月）
- 第68集 南小泉遺跡－都市計画道路建設工事関係第3次調査報告（昭和59年3月）
- 第69集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報III（昭和59年3月）
- 第70集 戸ノ内浦遺跡発掘調査報告書（昭和59年3月）
- 第71集 後河原遺跡（昭和59年3月）
- 第72集 六反出遺跡II（昭和59年3月）
- 第73集 仙台市文化財分布調査報告書II（昭和59年3月）
- 第74集 郡山遺跡V－昭和59年度発掘調査概報－（昭和60年3月）
- 第75集 仙台平野の遺跡群IV（昭和60年3月）
- 第76集 仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書（昭和60年3月）
- 第77集 山田上ノ台遺跡－昭和59年度発掘調査報告書－（昭和60年3月）
- 第78集 中田畠中遺跡－第2次発掘調査報告書－（昭和60年3月）
- 第79集 欠ノI遺跡発掘調査報告書（昭和60年3月）
- 第80集 南小泉遺跡－第12次発掘調査報告書－（昭和60年3月）
- 第81集 南小泉遺跡－第13次発掘調査報告書－（昭和60年3月）
- 第82集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報IV（昭和60年3月）
- 第83集 年報6（昭和60年3月）
- 第84集 仙台市文化財分布調査報告書III（昭和60年3月）

仙台市文化財調査報告書第79集

欠ノ上 I 遺跡

—平安時代末～中世の水田跡—

昭和60年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市国分町3-7-1
仙台市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社 共新精版印刷

仙台市日の出町2-4-2
TEL 36-7181

